
Tales of the abyss ～希望を紡ぐ者～

玄武の使者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tales of the abyss
（希望を紡ぐ者）

【Nコード】

N2658I

【作者名】

玄武の使者

【あらすじ】

アビスの世界に召喚された少女、高町 なのはが預言スコアを覆すために奮闘する物語。（注意）この作品では、なのはが最強になっています。

プロローグ（前編）（前書き）

こんにちは。玄武の使者です。前の作品が完結してませんが書き始めました。前の作品は削除して書き直すかもしれません。相変わらず文章力は皆無です。

プロローグ（前編）

プロローグ（前編）

くとある次元世界

荒廃した次元世界。人一人いないはずの場所に一人の少女がいた。その少女は、白い衣服を身に纏い、金色の杖を携えていた。その少女の眼前には、金色の球体。

「これが対象のロストログアだね？」

《はい。間違いありません。》

「名称“ローレライ”か。そんなに危険な物には見えないけどね。」

《油断大敵ですよ。マスター。》

「わかってるよ、レイジングハート。さてとさっさと回収するよ。」

「応えよ。」

「えっ！レイジングハート、何か言った？」

《いいえ、何も言ってませんよ。》

「応えよ。異世界の我が同位体よ。」

同時に大量のエネルギーが放出される。

「きゃああああ！」

そして、辺り一面を光が覆い、光が消えるとそこには…誰も居なかった。それは、とある組織で“エース オブ エース”と呼ばれた少女が異世界へと渡った瞬間だった。

プロローグ（前編）（後書き）

前から考えていた物を書き始めました。次回の更新はいつになるかわかりません。もっとも期待している人なんて居ないかもしれないかもしれませんが。

プロローグ（後編）（前書き）

ほとんど会話文になってしまいました。

プロローグ（後編）

ロストロギアの力で不思議な場所に飛ばされたなのはとレイジングハート。そこで出会ったのは……？

Tales of the abyss

～希望の紡ぐ者～

「……？？」

何もない不思議な空間。その中に一人の少女が浮かんでいた。

「目覚めよ。」

少女の前に橙色の“何か”が集まり、人のような形を形作っていく。

「……、此処は？」

少女が目覚める。

「気が付いたか。」

「貴方は？それに…此処はどこですか？」

「我が名はローレライ。そして、此処は我が空間だ。して、汝の名は？」

「なのは、高町 なのは。」

「なのはよ。汝に頼みがある。」

「頼み、ですか？」

「我がいる世界“惑星オールドラント”には、星の未来を書いた“^{スコラ}預言”という物が存在する。そして、人は預言に従って生きれば幸福に成れると信じている。」

「でも、それじゃあ、何の問題もないんじゃないかあ…。」

「だが、預言には星の滅亡しか詠まれておらぬ。」

「っ！！まさか！」

「然り。このままでは、オールドラントは滅びてしまう。だから、汝に頼みたいことは預言の成就の阻止だ。」

「……………」

「引き受けてくれぬか？」

「……わかりました。引き受けます。」

「すまぬな。では、契約の証として汝にオールドラントでの名を与えよう。」

「名前？」

「そうだ。今のままの名前では、怪しまれる可能性がある。」

「あっ！そうか。」

「汝の名は…、 “ 希望を紡ぐ者、 フィーネシア・ベルセルク ” だ。」

「フィーネシア・ベルセルク…？」

「では頼むぞ。フィーネ。」

そして、世界は光に包まれる。

プロローグ（後編）（後書き）

急いで書いたため変になってしまいました。読んでくれてありがとうございます。

第壱話

オールドドラントでの名を与えられたなのは。目覚めたなのは見たのは…。

Tales of the abyss

〈希望を紡ぐ者〉

第壱話

なのは視点

目が覚めると薄暗い森の中だった。

「此処は…?」

《お目覚めですか、マスター?》

「此処は、ダアトの北西の森だ。」

ローレライの声が響く。

「ローレライ教団の総本山か…、あれ? 何で私、此処のこと、してるの? それにローレライ、何処にいるの?」

「我はここだ。」

ローレライの声が聞こえた方をみると私の首にさっきまでなかった橙色の六角形のペンダントが掛かっていた。もしかして…これ?

「そのとおりだ。それと、フィーネが此処のことを知っているのは、我がこの世界の知識を与えたからだ。」

いつの間に……

「汝が眠っている間だ。」

「どれくらいねてたの？」

《大体二時間ぐらいです》

「いや、正確には二時間十分だ。」

というよりレイジングハートが喋ってることに驚かないんだね。

「当たり前だ。」

「さっきから思ってたんだけど、私の心読まないでくれないかな？」

「我は次元世界の存在を知っていたからな。」

「無視！？ていうかそんなこと聞いてないですけど?!」

「言っていないからな。」

「じゃあ、おしえてよ！」

「汝の相棒から聞くとよい。我は他の分身に報告しなければならん。」

分身？どういふことだろう？レイジングハートには教えてるみたい

だし…、レイジングハートから聞いてみるかな？

「じゃあ、レイジングハート、教えてくれる？」

《はい。ローレライがいうには……

レイジングハートの説明を纏めるとローレライは次元世界の存在を知っていて、自分の分身を次元世界に巻いて、ローレライと適合する人を探していたらしい。今、この世界にいるのは私を含めて5人。元は6人だったが、1人は殺されたらしい。他の4人は各地を巡ってるらしい。

「終わったようだな。」

「そっちも終わったみたいだね。」

「ああ。」

さてともう一つ聞かないとね。

「ねえ、ローレライ。ずっと気になっていたんだけど、この剣、何なの？それに服も変わってるし…。」

なのはは、自分の腰に携えてる剣を指差した。そして、バリアジャケットも自分の友人の八神 はやと似た物で違うのはカラーリングぐらい。ジャケットは青で縁取りされており、腰巻きは白く、黒で縁取りされている。

「その剣は”エクスカリバー”。他の音素集合体が協力して作った物だ。その剣には音素を集める能力がある。鞘の方には音素を拡散

する能力がある。」

「へえ、そんな能力があるんだ。じゃあ、鞘で譜術の無効化もできるの?」

「無論だ。だが、汝には“超振動”があるからそちらの方を使えばよいのかな。」

たしかに“第二超振動”を使えばできるけど…、超振動は…

「超振動は“セブンスフォニマー第七譜術師”が2人居ないと発生しないんじゃないの?」

「その必要はない。汝は異なる世界で生まれた我が同位体だ。1人で超振動を起こすことが可能だ。」

「“第二超振動”も?」

「負担が大きいだろうが、可能だ。それと、フィーネ。汝に聞いたことがある。」

「何?」

「汝に人を切る覚悟はあるか?」

「っ!!…あるよ。」

なのはは、顔を俯きながら答える。

「そうか。でh「でも!」…なんだ?」

ローレライの声を遮り、俯かせていた顔をあげ、自分の覚悟をつける。

「必要最低限の人しか殺さない！これが私の決意！」

「……そうか。そういえば、汝は剣を扱えるのか？」

「今更だね。お父さんから二刀流の剣術を習ったよ。」

《それなら、何処かの街で剣を買わなくてはいいけませんね。》

「鞘を使えばいいでしょ？それより、今、何年なの？」

一番肝心なことを問う。

「今は“ND2016”だ。」

ND2016。導師イオンが死亡するときか。なら、最初の仕事は……

「導師イオンの救出だね。」

「ああ。だが、そのままでは、預言の狂信派に殺されるだろう。」

「なら、救出した後、教団から連れ出さないかね。」

「ああ。では、行くぞ。」

「うん。」

こうして、希望を紡ぐ者は預言を覆すため、行動を開始した。

「そういえば、服はどうしたの？」

「フィーネの記憶を覗いた時にちょうど戦闘に向きそうな服を選び、少し色を変えただけだ。」

「……神様って何でもありね。」

第壱話（後書き）

第壱話、投稿しました。ローレライの話がちょっとわからない。
後二、三話で他のなのはキャラを出す予定です。では、また次回。

第貳話（前書き）

若干、イオンの性格が変わってます。

第貳話

ローレライの説明を終えたなのは。なのはは、導師イオンを助け出すため、ローレライ教団総本山、ダアトへと向かった。

Tales of the abyss

（希望を紡ぐ者）

静まりかえったダアトの街の上空を駆け抜ける人影があった。その人影は、桜色の翼のようなものをはためかせてローレライ教団へと向かっていった。

「ローレライ、導師イオンの部屋、何処か解る？」

「いや、我とて万能ではない。しらみ潰しに探すしかなかろう。」

「まあ、飛行魔法と認識阻害魔法が使えるから、人目を気にしなくて言い分楽だけど。」（注意）防音結界を張っているため、周囲には聞こえてません。

（数十分後）

「レイジングハート、今何部屋目？」

《12部屋目です。》

「あれだけ調べたのに、まだまだあるって、どれだけ多いのよ!」

「総本山だからな。」

それはそうだけど……?

何か聞こえたような…

「レイジングハート、何か聞こえなかった?」

《いいえ。ローレライは?》

「いや。我にも聞こえなかったが……」

気のせい? ……違う! 気のせいじゃない! ……泣いてる? あっちの部屋から聞こえる。

現在位置から少し離れた部屋へむかう。

「ここから聞こえる。」

部屋を覗いて見ると緑色の髪をした子供がベッドで泣いていた。

「死にたくない。誰でもいいから僕を助けて…。」

……この子が導師イオン。まだ幼いのに……

ローレライの力を借りて、窓の鍵を超振動で破壊する。飛行魔法、認識障害魔法、防音結界を解除して部屋に入る。

「こんばんは。導師イオン」

「誰ですか？」

「預言を覆す者、かな？」

「その預言を覆す者が死に損ないの僕に何の用ですか？」

「単刀直入に聞きます。導師イオン、生きたいですか？」

「預言は絶対です。僕に生き残る方法なんてあるとすれば？」……本当に可能なのですか？」

「可能だから言っているのですよ。導師イオン。」

「……このまま何もせずに死ぬのもいやですから、僕の命、貴女に預けます。」

「初対面の人にあまりそういうことを言わない方がいいですよ。」

「それでも人を見る目はあるほうです。貴女は信頼できる。」

「お褒めにあずかり光栄です。では、まずこの街からですよ。」

そういうとなのはは、イオンを抱き抱え、魔法を行使して再び夜の空へと飛び立った。

後で魔法について説明しなきゃ。眠らせているから大丈夫だとは思
うけど……

つとこら辺でいいか。

イオンを寝かせるのは。

「じゃあ、ローレライ。お願い。」

「任せろ。導師の胸に手をあてろ」

ローレライの言われた通りイオンの胸に右手を置く。すると、なのは体が橙色の光に包まれ、イオンの身体を治療していく。

「これで大丈夫だ。」

「ふう、疲れた。」

「かなりの精神力を使ったからな。仕方ないだろう。」

すやすや眠っているイオンを見る。

可愛い寝顔。普段は、あんなに大人ぶってるのに……これも預言に縛られてるからなのかな……。

「ローレライ、イオンの両親はどうしてるの？」

「あやつの両親はすでに死んでいる。」

「そっか。ねえ、ローレライ……って、できる？」

「可能だが、どんな影響がでるかわからんぞ。」

「まあ、あの子の意志しだいだよ。」

「そうだな。だが、今日はもう遅い。もう寝た方が良い。」

「うん。また、明日。」

（翌朝）

イオン視点

うーん。朝日か。あれ？僕は昨日で死ぬはず……そういえば、夜に誰か来て…

「あっ！起きたんだ。」

確かこの人が僕を……それにしても…綺麗な人だな…。

「あの…貴方は？」

「そういえば、名乗ってなかったね？私の名前はフィーネシア・ベルセルク。本名は、高町　なのは。」

「タカマチ　ナノハ？聞いたことない名前ですね。」

「当たり前だよ。私はこの世界の人間じゃないからね。」

はっ！僕は言われたことが一瞬理解できなかった。それから、色々説明された。次元世界のこと。この世界にきた理由。僕を助けた理由。

「僕にこんな話をしているんですか？」

「よくないよ。」

「じゃあ、なぜ？」

「……話は変わるけど、イオン、私達と一緒に行かない？」

「それって、なのはの世界に行くということですか？」

「そうだよ。だから、この話をしたの。」

「……なぜ、僕なんかを……」

震えた声でいう。

「孤独な目していたから。君を助けたいと思ったから」

僕はこの言葉に心を打たれた。

「あ……り……がとう。」

「それは肯定と受け取っていいのかな？」

「うん！これからよろしく、なのは！」

「じゃあ、イオンに新しい名前をあげる。」

「名前？」 「そうだよ。」

「いつまでもイオンじゃいやでしょ？」

「うん。」

「だから、今から君の名前は、“意志を貫き通す者” アルベル・ベルセルクだよ！」

「アルベル…。ありがとう！お姉ちゃん。」

「お姉ちゃんって…。」

「ダメ？」

「別に良いよ。じゃあ、行こっか、アルベル。」

「でも、何処へ？」

「ローレライがね、仲間をケセドニアに集めてくれてるから、目的地はケセドニアだよ。」

「うん。」

この日、導師は新しい名前と家族を手に入れた。そして、彼らは、同士が集うケセドニアへと向かった。

第弐話（後書き）

第弐話、投稿しました。改めて読むと自分の文章力の無さがよくわかります。こんな私ですが、よろしくお願いします。ちなみに、フイーネシアとアルベルの名前の意味はオリジナルです。

第参話（前書き）

今回は少し短めです。

第参話

イオン（アルベル）を助け出したのはとローレライ。一緒に旅することを決めたアルベル。3人はローレライの意見で同士が集うヶセドニアへと向かっていた。

Tales of the abyss

（希望を紡ぐ者）

第参話

一面の砂漠。その上歩いている2人。

「まだ着かないの？」

「もう少しだ。」

ペンダントから声が発する。

「暑いです。」

まあ、約2時間は歩き続けるしね。

「お姉ちゃんは暑くないの？」

「耐熱結界、張ってるからね♪」

「……僕にも張ってよ！」

「わかったよ。レイジングハート、お願い。」

《了解。耐熱結界を展開します。》

「ふう。便利だな、魔法って。」

「万能とまでは行かないけれど、かなりの応用はきくよ。」

「ふーん。」

「見えたぞ。」

「あれが、ケセドニア…」

「ケセドニア」

砂漠を歩くこと2時間半。耐熱結界のおかげで楽だったけど、それでも、魔物に襲われて大変だった。ちなみに襲ってきた魔物は私の剣術とアルベルの譜術で撃退してきた。認識阻害魔法のおかげで盗賊に襲われることはなかった。

「それにしても……にぎやかだね。」

「貿易が盛んだからね。」

「ところでローレライ。何処に集まってるの?」

「案内しよう。」

私とアルベルはローレライの案内で路地裏に来ていた。ちなみに、アルベルには変身魔法をかけている。

「何処にもいないよ。」

「いや、そろそろだ。」

私達の足元にベルカ式の転移魔方陣が展開される。この色は……銀色？

私の頭によぎったのは、自分の親友の一人を助けるために、犠牲になった“祝福の風”

「久しぶりだな。」

転移した先にいたのは、銀髪に紅い目の女性。

「リイン……フォース……さん……？」

「ああ。また会ったな、高町 なのは。」

「どうしてこの世界に？ それに…此処は？」

「この世界にいる理由は検討がつくだろう？」

「じゃあ、リインフォースさんも、預言を覆すために？」

「ああ。私だけではないがな。それと此処は、“タタル溪谷”だ。」

見渡して見ると、緑に囲まれ、すぐ近くには海。そして……

「お姉ちゃん。お、重いよ。」

「あっ！ごめんね、アルベル！」

アルベルの上から降りる。

「で、お姉ちゃん。この人は？」

「自己紹介は、全員揃ってからにしよう。」

「そういえば、他のメンバーは？」

「そろそろくるはずだ。……来たみたいだな。」

リインフォースさんに言われて、見渡すと空に藍色の道ができてい
る。耳をすますと何かの駆動音がしている。

「とーちゃーく！久しぶりね、リインフォース。それからはじめま
して。高町　なのはちゃんとアルベル君♪」

「えと…はじめまして。でも、何故私達の名前を？」

「ライから聞いているから。あっ！ちなみに、ライはローレライの
分身のことね。」

これであと2人だけど、誰なんだろう？

「どうやら私達が最後みたいね。」

その声に聞き覚えがあった。展開された紫色の魔方陣。そして、魔方陣から出てきたのは、虚数空間の落ちた親友の母親と親友と瓜二つの少女。

「プレシアさん…と…もしかして…アリシアちゃん。」

「あったり♪フェイトの姉のアリシア・テストロッサだよ♪」

「直接会うのは、初めてね。アリシアとフェイトの母、プレシア・テストロッサよ。」

私達の目の前に現れたプレシアさんはあの頃と違って穏やかな笑みを浮かべていた。

第肆話（前書き）

独自解釈が含まれています。ご注意ください。

第肆話

ケセドニアに到着したなのはとアルベル。ケセドニアからタタル溪谷に転移した。そこには、懐かしい顔ぶれもあった。

Tales of the abyss

～希望を紡ぐ者～

第肆話

～タタル溪谷～

太陽が最も高い時間。本来、めったに人がいない溪谷に6人の人影があった。

「では、全員揃ったところで自己紹介といきましょうか♪」

青色の髪的女性が切り出す。

「まずは私からね。私の名前はクイント・ナカジマ。マルクトで傭兵をしているわ。」

「次は私だな。リインフォースだ。これからは、お前たちと行動することになる。よろしく頼む。」

「最後は、私達ね。プレシア・テストロッサよ。普段は“ベルケンド”で科学者をやっているわ。」

「アリシア・テストロツサだよ♪ベルケンドでお母さんの助手をしているよ。」

クイントさんも魔導師みたいだね。

「さてと、自己紹介を終えたところで情報交換といきましょう♪」

何気にクイントさんが仕切ってる。

「私の方では、何もなかった。他はどうだ？」

リインフォースさんが言う。

「マルクトの方でも特にないわ。キムラスカの方は？」

「5年前だけど、キムラスカの王族の子供が誘拐されたわ。」

5年前！どれだけ情報交換してないんですか？！

「数日して見つかったけど、ほとんど赤子の状態で見つかったらしいわ。」

ほとんど赤子？……まさかとは思うけど……

「もしかして…“レプリカ”ですか？」

恐る恐るプレシアに尋ねる。

「……確証はないけど、多分そうだと思うわ。それと怖がらなくてもいいわよ。あの頃の私とは違うから。」

「…はい。」

プレシアさんの言葉を聞いて安心する。

「……レプリカの件ですが、十中八九レプリカです。」

アルベルが口を開く。

「5年前、“神託の盾騎士団”^{オラクル}に入団した男の子がいるんですが、その子が紅い髪に碧の目をしていました。」

「私も見たことがある。確か……“鮮血”のアッシュだったかな？」

「それともうひとつ。これは、ベルケンドの研究所で盗み聞きしたんだけど……」

盗み聞きって……プレシアさん、一応犯罪ですよ、それ。

「ヴァン・グランツが外郭大地全ての崩壊を計画しているわ。」

「「「!」」」

「外郭大地全ての崩壊って……正気な人がする事じゃないですよ。」

外郭大地を崩壊さして何をするつもりなの？

「プレシア、詳しいことはわからないのか？」

「今、わかってるのは、外郭大地を全て崩落させて、レプリカの大

地とレプリカの人類を創造するってことだけね。」

「「「なっ!!」「」」」

プレシアさんの言葉にアリシアちゃんを除く全員が驚く。

「……そんなこと…可能何ですか？」

プレシアに尋ねる。

「…理論上、不可能なはずよ。第七音素がある限り、人のレプリカなら長く維持できるけど、大陸ほどの大きさのレプリカは、長く維持できないわ。」

「それに、まず第七音素が足りないはずです。」

「ローレライを消滅させれば、第七音素は十分あるわ。」

「無茶なことを考えますね。」

「どちらにしても注意が必要ね。」

クイントさんが言う。

「各自はこのまま活動を続行。それとヴァンの動きにも注意しておいてね。」

クイントの言葉に全員が頷く。

「じゃあ、これで解散。」

そういうとクイントは藍色の道“ウィングロード”を発生させて、マルクトへ向かった。

さてと私達も行動しますか。

「高町。アルベル。」

「は、はい。」

プレシアさんに声を掛けられる。

「その……フェイト、どうしてる？」

……やっぱり、気にしてるんだ……プレシアさん。

「元気にしてますよ。今はリンディ提督の養女になってますが。」

「そう。よかった…。」

「私もフェイトに会いたいな。」

「この仕事が終わればきっと会えるわ。だから、それまでの我慢よ、アリシア。」

「はーい。」

「じゃあ、そろそろ行きます。リインフォースさんを待たせるわけにも行きませんか。」

「あつ、ちょっと待って。アルベルに渡す物があるの。」

「僕に、ですか？」

「そうよ。これ。」

プレシアさんが差し出したのは、アルベルの身長以上ある太刀だった。

「それは、“黒刀 漆黒”。あなたのお姉さんが持つてる“エクスカリバー”と同じ能力があるわ。」

アルベルが鞘から抜き放つと黒い刀身が現れる。

「こんなもの、本当に貰っていいんですか？」

「ええ。あなたも同士なんだから。」

「あ、ありがとうございます。」

プレシアに頭を下げるアルベル。

「じゃあ、私達もいくわ。お互い、頑張りましょう。」

「じゃあね。2人とも。」

プレシアさんとアリシアちゃんは転移魔法を使って帰っていった。

「では、私達も行くか。」

「はい。でも、何処に？」

「世界中を放浪しつつ、ローレライ教団の監視が主になる。後は、人助けだな。」

「ずいぶん適当ですね。」

「本格的な行動を起こすのは、ND2018からだからな。それまでは力を蓄えることだな。」

「さてと、まずはこの溪谷から降りましょう。」

スコア
預言を覆す者たちは、各自行動を開始した。

第肆話（後書き）

ローレライがほとんど脇役。

番外編 キャラ設定

（注意） 2年後の設定（本編開始時）です。

フイーネシア・ベルセルク（高町 なのは）

年齢…17歳

武器…エクスカリバー、譜銃

（服装）

上…黒いインナースーツの上に青色で縁取りされた白いジャケット。

下…黒く短いスカートと黒で縁取りされた白い腰巻き。

武器の詳細

（エクスカリバー）

なのはの愛剣。イメージはTOEのエクスカリバー。音素を収束する力を持つ。基本的に鞘との二刀流で使われる。

（譜銃）

青と白でカラーリングされたライフル型の銃。普段はレイジングハートに格納（？）されている。プレシア製。

（その他）

父の高町士郎から御神流の剣術を学んだため、接近戦も行える。
「不殺のフィーネ」という二つ名がある。

アルベル・ベルセルク（イオン・ダート）

年齢…14歳

武器…黒刀 漆黒

容姿…青い髪（染めてある）を腰まで伸ばしている。肩のあたりで一つに纏めている。

（服装）

上…白い長袖の上に緑の模様が入った黒いロングコート。

下…緑のラインが入った黒いズボン。

（その他）

フィーネシアを姉と慕っている。アリエッタからフィーネシアに鞍替えした。（笑）

フィーネシアからミッド式魔法を教わっている。

「蒼穹のアルベル」という二つ名がある。争いを好まない性格。しかし、親しい者を傷つける者には、容赦ない。

武器の詳細

（黒刀 漆黒）

黒い刀身の野太刀。普段は背中に背負われている。エクスカリバーと同じ能力がある。

クイント・ナカジマ

年齢…???

武器…アルテミス、ローラブーツ

（服装）

原作で少しだけ出てきたバリアジャケット姿。

（その他）

「粉碎のクイント」という二つ名がある。前向きな性格。

武器の詳細

（アルテミス）

青と黒でカラーリングされたガントレット。（カートリッジ非搭載のリボルバーナックル。両手に装備。）譜術障壁を無効化する能力がある。

（ローラブーツ）

ウイングロードの上を走るための物。プレシア製。

リインフォース

年齢…測定不能

武器…夜天の書、ソル&ルナ

（服装）

“闇の書の意志”の騎士甲冑から赤い紐を消したもの。

（その他）

「氷雪のリイン」という二つ名がある。

武器の詳細

（夜天の書）

ローレライの力で復元された。（守護騎士システムは搭載していない。）蒐集した魔法は勿論、譜術を使うことも可能。

（ソル&ルナ）

紅い刀身と白銀の刀身の双剣。紅い刀身のほうがソル。白銀の刀身のほうがルナ。ソルは反射、ルナは吸収の能力がある。

プレシア・テストロッサ

年齢…???

武器…トールセプター

（服装）

薄紫を基調とした上着に紺色のズボン。上に白衣を着ていることが多い。

（その他）

ベルケンドの研究所からシェリダンの研究所に移動した。アリシアが生き返ったため、優しい性格になっている。

武器の詳細

（トールセプター）

初期のレイジングハートと同じ形状した杖。黄色い宝珠がついている。譜術の威力を高める効果がある。

アリシア・テストロッサ

年齢…11歳

武器…ゲイボルグ、アイアス

（服装）

黒いインナースーツに白いラインが入った黒い半ズボン。裏が赤色、表は白いマントを羽織っている。

（その他）

「雷槍のアリシア」という二つ名がある。前向きな性格。

武器の詳細

（ゲイボルグ）

先端のほうが白銀、それ以外が青色の三又の槍。空間を歪めて、狙った場所に当てる能力がある。

（アイアス）

中心に六望星の紋章が刻まれた円型の盾。強度が極限まで高められている。プレシア製。

第伍話（前編）

イオンの救出から2年後……物語が動き出そうとしていた。

Tales of the abyss

（希望を紡ぐ者）

第伍話（前編）

西ルグニカ平野

「嬢ちゃんたち、護衛、ありがとうな。」

「依頼ですから。」

栗色の髪をサイドポニーに纏めた女性、フィーネシア・ベルセルクが言う。

「それでも、こっちは大助かりだよ。」

「今回は、比較的楽な方だ。」

銀髪の女性、リインフォースが言う。

「そうかい。ほら。報酬金だ。」

「ありがとうございます。」

青髪の男の子、アルベル・ベルセルクが言う。

「じゃあな。嬢ちゃんたち。帰り道、気い付けてな。」

三人は軽く会釈して去っていった。

「どれくらいもらったの？」

「だいたい5000ガルトですね。」

「これで暫くはもつな。」

だいたい1ヶ月ぐらいかな。今回は、盗賊も襲って来なかったし、魔物も少なかったし。

「武器の手入れはちゃんとしておけよ、アルベル。」

「わかってますよ、リインフォースさん。」

「じゃあ、そろそろ野宿の準備をしようか。」

「また、野宿か……」

アルベルは野宿が嫌いだからね。

「まあ、明日は普通のベッドで寝れるだろう。それまでの我慢だ。」
そう言ってアルベルの頭を撫でるリインフォースさん。なんかだだっ子を慰める母親みたいだね。

「フィーネシア、今何か失礼なことを考えてなかったか？」

「そんなことないよ。それと！部外者がいない場所では、本名で読んでください！」

「ああ。すまないな、なのは。」

「♪じゃあ……！！アルベル！リインフォースさん！」

満足したのか眠りに入ろうとすると異変が起きた。

「ああ。第七音素が収束しているみたいだな。」

「この方向は……タタル溪谷だよ。お姉ちゃん。」

「ローレライ、何かわからない？」

「ライから連絡があった。」

ライというのはプレシアさんとアリシアちゃんについているローレライの分身である。

「キムラスカで発生した“疑似超振動”が原因らしい。」
“疑似超振動”？一体、誰が……」

「さあな。そこまではわからん。」

「まあ、害はなさそうだ。ほっておいて大丈夫だろ。」

「じゃあ、いっか。じゃあ、寝ずの番お願いします、リインフォースさん。」

「ああ、わかった。アルベル、お前も休め。」

「わかりました。」

「じゃあ、おやすみなさい。アルベル、リインフォースさん」

そして、私は眠りについた。

（翌日）

翌朝：出発の準備をしていると、リインフォースさんが入ってきた。

「なのは、アルベル。起きろ。緊急事態だ。」

起きてますけどね……

「どうしたんですか？」

武器の手入れをしていたアルベルがとう。

「ウルフに囲まれた。ざっと30匹ぐらいだ。」

そう言われて外に出る三人。

「わゝ、確かに30匹ぐらいいるね。」

いや、もつというかも……そうだ！

「ねえ。倒した数が一番少ない人が今日のご飯当番っていうのはどう？」

「いいだろう。」

「僕もいいですよ。」

「よし。じゃあ……戦闘開始！」

掛け声と共に三人が自分の武器を抜く。そして、三人はウルフの群れに駆け出す。

「魔神剣 焰！」

漆黒に第五音素を収束させて、炎を纏った魔神剣を放つ。

「ぎゃう！」

命中したウルフが絶命して音素に戻る。

「炎竜一閃！」

炎を纏ったエクスカリバーでウルフを一刀両断する。更に発生した炎で周りにいたウルフも消滅する。

「まだだよ！業火滅殺陣！」

剣を地面に突き刺し、そこを中心に巨大な炎の柱があがる。

「やりすぎ…じゃ！ない！か！」

会話をしつつ、ソルとルナでウルフを切り続ける。

「面倒だ！遠き地にて 闇に沈め！デアボリック・エミッション！」
詠唱が完了すると同時に空間攻撃が発生する。そして、半径10M
の亜空間が発生してウルフの群れを呑み込む。

〽数分後〽

30匹はいたウルフの大部は一匹もいなくなっていた。

「ふう〽何匹倒しました？」

「私は15匹だ。」

「僕は13匹です。お姉ちゃんは？」

「……11匹。」

「ふっ。言い出しっぺが該当者とはな。」

「うっ！だって、私のところには集まって来ないんだもん。」

涙目で訴える。

「お姉ちゃんが怖「何か、いった？」……何でもありません。」

アルベルを軽く威圧する。

「意外に時間を取ったな。早くエンゲーブに向かうぞ。」

「はい。」「わかりました。」

（数時間後）

認識阻害魔法のおかげで魔物に襲われることもなく、無事エンゲブに到着。でも何か騒がしい。

「どうしたんだろう？」

「さあな。聞いてみるか。」

近くにいた男性に話しかける。

「あの、何かあったんですか？」

「ん？ああ、フィーネシアか。いや、詳しいことはわからないけど、最近頻発していた食料泥棒が捕まったらしい。」

「わかった。ありがとうね。」

そう言って、リインフォースさんとアルベルとともに村長の元へ向かう。

「ローズさん、依頼を終わらせてきました。」

「おや、あんた達かい。ご苦労様。」

「フィーネシア！ちょうどいい。その食料泥棒を懲らしめてくれ！」

「だから、俺じゃねえ！！」

そこにいたのは、明るい赤色の髪に碧の目をした男性だった。これが、“聖なる焰の光”と“希望を紡ぐ者”の初めての出会いだった。

第五話（前編）（後書き）

戦闘シーンを入れてみた。戦闘描写が難しいです。
では、また次回。

オリジナル技

魔神剣・焰

使用者…アルベル

（説明）

炎属性の魔神剣。野太刀から放つため、普通の魔神剣より攻撃範囲が広い。

炎竜一閃

使用者…フィーネシア

（説明）

炎を纏ったエクスカリバーで薙ぎ払うわざ。追加効果として炎を生させる。

業火滅殺陣

使用者…フィーネシア

（説明）

地面に剣を突き刺して剣を中心とした半径3Mの炎の柱を発生させる。上空の敵にも攻撃できる。

第伍話（後編）（前書き）

今さらですが、この作品はフィーネシア（なのは）視点がデフォルトになっています。また、この作品は原作を知っていることを前提に書いています。

第伍話（後編）

依頼を終えた三人はエンゲーブに帰ってきた。村長の家で出会ったのは、“聖なる焰の光”だった。

Tales of the abyss （希望を紡ぐ者）

第伍話（後編）

「だから、俺じゃねえ!!」

赤毛に碧の目：キムラスカの王族に連なる者の証。

『なのは、こいつは……』

リインフォースが念話で話しかける。

『はい。多分、聖なる焰の光の“複写人間”^{レプリカ}だと思います。』

プレシアさんから連絡があった疑似超振動の原因がこの人たちかな？

「その人達は違いますよ。」

そう言って表れたのは、緑髪の少女のような少年、イオン・ダアトだった。

「イオン様。」

さっきからいたマルクトの軍服を着た紅い目の男性が呼ぶ。

『アルベル、あれが……』

『はい。あれが僕の七番目のレプリカです。』

『きつくない？』

『大丈夫だよ、お姉ちゃん。もう割り切ったから。』
『そう。』

「ほら見ろ！俺たちじゃなかっただろ！」

「ああ、すまなかった。」

イオンのおかげで疑いはれたようだね。でも、チーグルが犯人……
変だね。チーグルは草食のはず……

「さあ、私はこの軍人さんと大事な話があるから、ほかの奴は出ていった、出ていった。」

野次馬を散らすローズ。

「さてと私たちも宿屋行きますか？」

「はい。ようやくベッドで寝れます。」

「にやははは……」

もう苦笑いするしかない。

「おい、フィーネシア、リインフォース、アルベル。」

男性が声をかけてくる。

「実は、頼みがあるんだ。」

頼み？だいたい予想できるけど……

「チーグルの森の調査を頼みたいんだ。もちろん、報酬ははずむよ。」

やっぱりね〜♪

「まあ、僕たちも気になってたから断る理由はありませんけどね。」

「そうかい。じゃあ頼むよ！明日でもいいから。」

そう言って男性は去っていった。

「さてと、明日に備えて寝るか？」

「了解」「はい。」

〜翌朝 チーグルの森〜

「それにしても、草食のチーグルがエンゲーブの食料を奪うんだろう？」

「それを今から調べるんだろ？……待て。後ろから人の気配がする。」

「「えっ！」」

リインフォースの言葉を聞いて後ろを振り替えると……

「ライガ四匹に囲まれている……導師イオン！」

「何でこんな所に！しかも、フォンマスタ―ガーディアン“導師守護役”を連れずに！」

アルベルが声を上げる。

まったく…困った導師だね。でも、助けないとマズイから……久々だけど

「精密射撃、やってみようか。」

《精密射撃は得意分野ではないはずですが？》

「それを言わないでよ、レイジングハート。とにかく譜銃を出して！」

《了解。》

フィーネシアの手に青と白でカラーリングされた譜銃が現れる。

「フレイムバレット！」

第五音素を籠めた弾丸（プレシア製）を放つ。

「ぎゃう！」

「「！ぐるるる。」」

仲間が殺されたためか、標的をフィーネシア達に変える三匹のライガ。

「「ガアッ！」」

そして、三匹のライガが同時に牙を向いた。だが……

「黒刀拔刀！」

アルベルがいち早くきずき、漆黒を拔刀する。そして、薙ぎ払う。ライガは避けられず絶命した。

「ありがとうね、アルベル。」

「どういたしまして。」

漆黒についた血を払い、納刀する。

「大丈夫ですか！イオン様」
更に奥から女性の声が響く。

あの人は……確か、昨日ルークと一緒にいた……

「僕は大丈夫です。あの方達のおかげで。」

歩みよってきたフィーネシア達を見る。

「ところであなた方は？」

「ルークだ」

「私はオラクル騎士団所属ティア・グランツ響長です。」

ティアの自己紹介に驚くイオン。

「あなたがあのヴァンの妹ですか?!」

「……はい。」

「はぁ！お前が師匠の妹!!じゃあ、何で師匠、殺そうとすんだよ?!」

「貴方には、関係無いわ。」

「殺す？」

「いっいえ、こっちの話です。」

何かあるみたいだね。あの子。ヴァンの妹か…レプリカ大地計画について何かしってるかな？

「あの……あなた方は？」

思案の海に浸っていると突然、声を掛けられる。

「あっ、すみません、導師イオン。私の名前はフィーネシア・ベルセルクです。」

「フィーネシア？まさか“不殺のフィーネ”ですか？」

あゝ、そう言えばそんな二つ名があったね。

1年前、スコア狂信派の軍団に襲われた時、一人の軍人が言っていたことを思い出す。

「……はい。」

私の返答を聞いて、ルーク以外が驚く。そんなに有名だったけ？

「何、驚いてんだ？」

ルークがティアに聞く。

「あなた、知らないの“不殺のフィーネ”こと！（ヒソヒソ）

「うんなもん知るかよ。（ヒソヒソ）」

2人とも聞こえてるよ。

「二年前、スコア狂信派の軍団を一人で、しかも、一人も殺さないで撃退した人よ。（ヒソヒソ）」

そんなこともあったね。

「じゃあ、残りの2人も…」

「“氷雪のライン”ことラインフォースだ。」

「“蒼穹のアルベル”ことアルベル・ベルセルクです。」

アンチ・スコア
「反預言派が女性ばかりなんて…」

イオンの発言に周りの空気が凍る。

あゝあ。アルベルに禁句、言っちゃった。

「導師イオン？」

「はっはい！」

完璧に怖がつてるね。よく見るとガグガグ震えてるし……残りの2人も同じみたいだね。

「僕は正真正銘の男の子ですからね！」

「でっでも、どうみておんん「何か、言いましたか？」…ナンデモアリマセン。」

再び禁句を口にしようとしたイオンを軽く威圧するアルベル。

「でっ？導師イオン様がどうしてここに？」

若干の殺気を漂わせながら、ここにいる理由を問いただすアルベル。

「チーグルのことが気になって……それで……」

「まあ、チーグルはローレライ教団の聖獣ですからね。でも、どうして一人で？」

「導師守護役がいるはずですが？」

「それは、黙って出てきたからです。」

「「はっ?」」

ちよつと！それはダメでしょ?! つか、導師守護役も護衛対象を見逃したらダメでしょ?!

「おい。取り込み中の所悪いが…」

今まで黙っていたリインフォースが口を開く。

「どうかしましたか？」

スツとリインフォースが指さした所を見ると、チーグルがいた。

「チーグル!」

「みゅううう!」

見つけた途端、逃げ出すチーグル。

「あっ！待ちやがれ!」

そして、それを追うルーク。

「ちよつと、ルーク!」

更にその後を追うティア。

「∴私たちも行きましようか、イオン様？」

「あっ！はい。」

私たちも後にくくように森の奥に歩んでいった。そう言えば、あの
ティアって子、ルークにタメ口だったけど不敬罪にならないのかな？

第五話（後編）（後書き）

ローレライのセリフが全くない……orz

オリジナル技

フレイムバレット

使用者…フィーネシア

（説明）

第五音素を籠めた弾丸を打ち出す。弾丸はプレシア特製。“ファイアボール”より威力が高い。

第陸話（前書き）

色々省いています。

第陸話

チーグルの森に着いた3人。そこでたまたま、ルーク、ティア、イオンに合流。イオンの発言でひと悶着あったが、チーグルの追跡を開始した。

Tales of the abyss

（希望を紡ぐ者）

第陸話

チーグルの後を追う6人。魔物も出てきたが、難なく撃退した。

「あれがチーグルの巣です。」

イオンが大木を指差す。

「ん？……これは、リンゴ？」

「それにエンゲーブの焼き印が押してあるし、犯人はチーグルで決定だね。」

「とっとと中に入ろうぜ。」

まあ、入って理由を聞かないとわからないしね。

「みゅううう！」

色とりどりのチーグルが威嚇してくる。全く怖くない。寧ろ…可愛
い。

「ちょっと…通してください。」

導師イオン、困ってるね。でも、このままじゃ私たちも理由を聞け
ないな…

「ねえ。ちょっと退いてくれないかな？」

冷めた声で願うする。

サッ！

今まで群がっていたチーグルがまるでモーゼの十戒のように割れる。
よく見るとチーグルがガグガグ、ブルブル震えてる。何でよ…

「お姉ちゃん、いい加減自覚したほうがいいよ。」

「ちょっとどういうことよ、アルベル！」

「そのままの意味だ。」

「ユリアの縁者か…」

言い合っているうちに奥から年老いたチーグルがでてきた。

「チーグルがしゃべってる…」

「このソーサラリングのおかげだ。」

あれがソーサラリング。ユリアがチーグルに与えたものか　…どう
いう原理何だろう？

「はじめまして。僕はローレライ教団の導師イオンです。」

「……ここに來たのは、食料泥棒の件か？」

「はい。チーグルは草食のはずですよ？なのに何故？」

「チーグル族存続のためじゃ」

チーグルの長老の話しによると…青色のチーグル、ミュウが東の森
のライガクイーンの巣を燃やしてしまい、ここに住み着いたらしい。
そして、食べ物を献上すれば、チーグルは食べないといったらしい。

「東の森のライガクイーンか……」

なのはの頭をよぎったのは、自分たちに協力してくれている桃色の
髪の毛をした少女、アリエッタだった。

アリエッタは、反預言派のスパイとして六神将に潜り込んでいる。
アリエッタにあったのは数ヶ月、東の森が燃えているのに気付き、
ライガクイーンを助けた時だった。助けた時、偶々仲間から連絡（
魔物を使った）を受けたアリエッタと遭遇したのだった。そのお礼
としてスパイをしてもらっている。アルベルの正体は話してないが、
今の導師イオンがレプリカであること、本当の導師イオンは死んで
いる（実際は生きているが…）ことを伝えた。しばらくは泣き崩れ
ていたが、アルベルの説得によってもちなおした。ちなみにこの頃
からフィーネシアは“姉様”と呼ばれている。また、連絡用として
“念話”も教えてある。

閑話休題

『アリエッタの母親を殺すのは、心苦しいね。』

『別の巣を提供すれば、何とかなると思います。』

「ライガクイーンを説得しましょう。」

事のすべてを聞いたイオンが言う。

「導師イオン、正気ですか？（まあ、本気何だろうが）」

「ええ。ライガをほっておくと町まで被害が及びます。」

「ですが、こちらにも非があるのも事実ですが？」

「うっ！確かにそうかもしれません。でも！」

意外と意志が固いね。

「まあ、ここに居るライガクイーンは私の妹分の友達の可能性があるかもしれないしね。」

本当は間違いないんだけどね。

「では、そのためにチーグルを一匹とソーサリングを貸して欲しいのだが……」

「ならば、このミュウを連れて行ってください。」

青いチーグルが歩いてくる。

「ミュウですの。よろしくですの。」

「必要なものは揃った。では、参りましょうか、導師イオン？」

「はい！」

何でリインフォースさんが仕切ってるの！

場所が変わってライガの巣

「あれがライガクイーン……」

ティアが驚嘆の声をあげる。

会うのも久しぶりだね。……ん？よく見ると後ろに卵があるね。

「ミュウ、クイーンにこの森から出ていくように言ってください。」

直球過ぎるよ！本当にアルベルのレプリカなの！アルベルと全然、性格違うよ！

「はいですよ！」

ミュウも了承しないで！それに、そんなことしたら……

ガアアアアアア！

ライガクイーンの咆哮にミュウが飛ばされる。
それをルークが掴む。

「ミュウ！クイーンは何て？」

「卵が孵るからでてけて言ってるのですの！」

「いけない！産卵期のクイーンはとても凶暴なの。」
ティアが声をあらげる。

「クイーン！」

アルベルの呼び掛けに反応する。

「私たちはあなたと戦いに来たんじゃないの！」

フィーネシアの声を聞いて、クイーンが止まる。

良かった…何とか反応してくれた。

「久しぶりだね。クイーン」

『フィーネシアか……』

クイーンの声が頭に響く。

ローレライの力でクイーンの声を聞いているのだ。

「うん。実は…巣を移してほしいんだ。」

『何故だ？』

「ここにいと軍があなたを殺そうとします。そうなるとアリエツ
タが悲しみます。」

『アルベル……わかった。だが、何処に移動すれば』

「この近くに霧が発生して、人が入って来ないところがある。幸い

食料も豊富だったはずだ。」

『そうか…では、そこに移動するでしょう。アリエッタに伝言を頼めるか?』

「はい。必ず伝えます。」

そう言うときライガクイーンはライガを引き連れて森の奥へと姿を消した。

「よしと!さてと…いつまで隠れているの?」

「「「えっ!」」」

今まで黙ってた3人が驚く。

「おや。まさか気づかれるとは……」

「マルクトの軍人さんが何の用ですか?」

「イオン様を連れ戻すためですよ。あなた方は“アンチスコア”みたいですね。今、何か依頼がありますか?」

「いや、ちょうど終わった所だ。」

「なら、依頼したいことがあります。」

「わかった。恐らく導師イオンの護衛だろ?」

「話が早くて助かります。」

「私たちはエンゲーブに戻って依頼の報告をしなければならん。後で来てくれないか？」

「はい。わかりました。」

こうして一足早く帰ることにした。

エンゲーブに戻って依頼の報告を済ませた私たちは道具を揃えて出口で待っていた。

「それにしても、あの“死霊使い（ネクロマンサー）”からの依頼なんてね。」

「まあ、和平を結ばれては色々困る人もいましからね。」

私は大歓迎だけどね。

ん？…何か走って…ライガ！

ライガがよってくる。口には手紙がくわえられている。

「アリエッタからの手紙？何々……わかった。気をつけるよ。」

私が頷くのを見てライガは帰っていった。

「何と書いてあったのだ？」

「六神将がタルタロスを襲撃するらしいです。アリエッタは参加しないそうです。」

「そうか。」

「それともうひとつ。アリエッタの手紙の最後に気になることが…」

「気になること、ですか？」

そうアリエッタの手紙には最後にこう書かれていた。

「導師イオンの導師守護役、アニス・タトリンはモースのスパイの可能性あり。注意してください。」と

第漆話

チーグルの森の調査を終えた3人はマルクト軍人、ジェイド・カーティスの依頼で導師イオンの護衛をしていた。

Tales of the abyss
～希望を紡ぐ者～

第漆話

～タルタロス 甲板～

「アリエッタの手紙の内容、どう思う？」

「あの子ことだ。嘘ではないはずだ。」

そうなんだけどね。一応……確認してみただけ。

「それとクイントからの連絡では、アクゼリウスで嶂気が溢れてたらしい。」

成る程ね。今回の和平はアクゼリウスの救援が含まれているわけね。確か、陸路が使えないはずだしね。
ということは……

「分岐点、か……」

フィーネシアが漏らした言葉は誰にも聞こえてなかった。

「それにしても、導師イオンには同情するよ。」

「あゝ確かに。」

あの導師守護役はあり得ない。能力は高いみたいだけど、性格がダメ。極秘事項を普通に喋ってたし……アルベルは幸運だね。導師守護役がアリエッタだもん。

「アリエッタは優秀でしたから、僕も助かりました。」

だろうね。魔物に育てられたため、発達した嗅覚。気配にも敏感だし、護衛にはもってこいだね。

「アニスの前では、あまり力を見せないほうがいい。モースのスパイである確証はないが、万が一ということがある。」

別に力を使わなくても何の問題もないと思うけど……

「お姉ちゃん、探知結界に引っ掛かった。」

アルベル……いつの間に展開してたの？

「数は？」

「魔物が数匹、オラクル騎士団が百人ぐらいかな？」

魔物？アリエッタは協力してないのに？……っ！そうか！

「暗示を掛けてるのか！」

リインフォースが声をあげる。

“暗示”とは、対象者に特定のワードを言うとき対象者は自分で自分をコントロール出来なくする術である。自分で打ち破ることも可能だが、並大抵の精神力では打ち破ることが出来ない。

閑話休題

めんどくさいね。術を無効化するには“第二超振動”しかないけど……

周りを見渡す。

誰もいないみたいだから、大丈夫だね。

「ローレライ！第二超振動を遠隔発動させるから、制御お願い！」

「やれやれ。久々の出番がこれとはね。まあ、断る理由はないがね。」

ローレライの力を借りて、第二超振動を魔物の群れの中心に発動させる。

第二超振動の遠隔発動とは、本来自分の周りにしか発動出来ない第二超振動を遠い場所（発動者の視界だけ）で発動させる最強の術である。しかし、ローレライの補助を受けたのはしか使えない。

「成功したみたいだよ、お姉ちゃん。」

アルベルに言われて見てみると魔物たちがオラクル兵を落として帰

っていった。

「これで安心だね。でも、さすがに疲れたよ。」

第二超振動の遠隔発動は負担が大きいね。今日1日は超振動も使えそうにないね。

「休憩している暇はなさそうだ。」

周りを見ると解除仕切れなかった魔物たちに乗ったオラクル兵に囲まれていた。

「向こうは殺る気満々みたいだね。」

敵に囲まれているこの状況でものんびりしているね、アルベル。まあ、全員したっばだし、当然か

「なのは、魔物たちもいる。油断するなよ。」

「わかってますよ。いつ六神将が出てくるかわからないから、さっさと倒す！アルベル！！いくよ！」

殺すのは嫌だけど…今回ばかりは仕方ない。……ごめんなさい。

心の中で謝りながら、右手にエクスカリバーを。左手に鞘を持つ。アルベルも自分の剣を抜き、リインフォースもソルとルナを抜く。

「かれ！」

約二十人のオラクル兵が一斉に襲い掛かってくる。

「はああアア」

「遅いよ！」

オラクル兵をエクスカリバーで一閃する。

「ぐあっ！」

直撃を受けて絶命する。

「後ろがから空きだ！」

「っ！」

まずい！反応が遅れた！

「雷光斬！」

「ガハッ！」

オラクル兵に雷の剣が降り下ろされ、絶命する。

「大丈夫、お姉ちゃん。」

アルベルがほほえみかける。

だから、女の子に間違えられるのに……でも…

「ありがとう、アルベル。」

危ない危ない。戦闘に集中しなくちゃ。でも、数が多い！…一気に

けりをつけるか。

『アルベル。一気にけりをつけるよ!』

『わかった。リインフォースさん!』

『何だ? 此方は魔物の相手で忙しいんだが……』

『纏めて倒すから時間稼ぎをお願いします。』

『わかった。』

「いくよ、アルベル!」

「うん!」

漆黒とエクスカリバーに第五音素を収束させる。そして、膨大な第五音素が収束する。

「「N&a m p; A 集団殲滅コンビネーション!」」

「「鳳凰殲滅陣」」

いいかんじに固まっていた敵を炎の線が円を描いて囲む。そして、円から巨大な火柱が上がる。まるで不死鳥が飛び立つように…。

火柱が収まるとオラクル兵が全員ひれ伏し、魔物たちは絶命し音素に還っていた。

「これで全員かな?」

「いや、油断するな。」

「その通りだ。」

男性の声が響く。

「「っ！」」

間一髪気付き、後ろから降り下ろされた鎌を避ける。
「くっ！」

マズイ。少しかすった。

「ほう。いい反応だ。」

見上げると赤と黒の騎士団服を着た大男がいた。

この人って……思い出した！確か、六神将の一人……

「“黒獅子”ラルゴ！」

「ふっ。やはり俺のことを知っているか……。」

当たり前でしょ。

「六神将のメンバーは全員、有名ですから。」

「お前たちほどではない。」

たわいない会話しながら、武器を構える。

「止めておけ。万全の状態ならまだしも、疲弊したお前たちでは勝てん。」

「やってみなくては、わからん思うが？」

「お前たち2人は大丈夫かも知れんが、“不殺のフィーネ”は立っているのがやっと思いたいぞ。」

くっ！気付かれてる。第二超振動の遠隔発動に秘奥義“鳳凰殲滅陣”の使用。正直、視界も少し霞んでいるんだよね。

「ここは一端退くよ、アルベル、リインフォースさん。」

「逃がすと思うか？」

「逃げるんだよ！」

アルベルとリインフォースさんの手を掴み、疑似超振動を使い、転移する。

転移が終了するとそこは、タルタロスの船室だった。さすがに近い距離しか無理か……

「アルベル、認識阻害の結界を張っておいて。」

「うん。」

「リインフォースさん。すいません。少し休みます。」

「ああ。ゆっくり休め。」

私はおぼつかない足取りで船室にあるベッドに入る。
力を使い過ぎたせいかなのはは直ぐに深い眠りについた。

第漆話（後書き）

ローレライさん、久々の登場。なのはさんがチート。でも、反動はちゃんとある。ちなみに暗示は独自設定です。では、また次回会いましょう。

オリジナル術技

雷光斬

使用者…アルベル

（説明）

雷を纏った漆黒で敵を切り裂く技。

鳳凰殲滅陣

使用者…なのは& a m p; アルベル

（説明）

なのはとアルベルの合成秘奥義。半径五十メートルの円を描き、その円内にいる敵を殲滅する秘奥義。技名の由来は、立ち上る火柱が鳳凰のようだから。

第捌話

導師イオンの護衛中、オラクル兵の襲撃にあつた3人。オラクル兵を殲滅したものの、その後に六神将の一人、黒獅子ラルゴに襲われ、一時撤退した。

Tales of the abyss
（希望を紡ぐ者）

第捌話

（タルタロス 船室）

……………。

……………。

……………。

…。

目が覚めると見知らぬ天井だった。

「……知らない天井だ。」

「ベタなギャグを言ってる場合か！」

スパーンッ！

「にゃっ！ なっ何するんですか！？ それに、どっからそのハリセン、持ってきたんですか！」

「船室を物色している内に見つけただけだ。」

何で、船室にハリセンがあるのか疑問だけど…私、何で船室に？…
：あっ！ 確か、ラルゴに襲われて疑似超振動で転移したんだっけ。

「リインフォースさん。私、どれくらい寝てました？」

「大体一時間ぐらいだ。」

「タルタロスの様子は？」

「オラクル兵は全滅したが、六神将が何人かいるようだ。」

乗っていた人たちも全滅かな？…悔しいな…。

そう言えば……

「導師イオンたちは？」

最も重要なこと聞く。

「サーチャをばら蒔いて見てたけど、導師イオンたちは無事みたい。
さっき六神将魔弾のリグレットと外に出て行ったけど。」

サーチャで観察していたであろうアルベルが言う。

でも、こんな場所で一体何を……

「アルベル、サーチャで何をしているか解る？」

「ちょっと待ってて。……………見つけた。これは…“扉”を開いてる？」

“扉”ってことは、狙いは“パッセージリング”？
でも、ユリアの血族が居ないと操作できなかったはず……じゃあ、
下準備？

「でも、何もせずにタルタロスに戻って来てるよ。」
正解は後者みたいだね。
それに、導師を取り戻すチャンスだね。

「アルベル、導師イオンを取り返すよ。」

「お姉ちゃんなら、そう言うと思ったよ♪」

「転移魔法を使う。」

リンフォースさんの足元にベルカ式の魔法陣が展開される。そして、私たちは転移した。

タルタロスの甲板に転移して数分後、急にタルタロスが止まったことに驚いたが、何もなく待ち伏せていた。

「来た！」

アルベルの声を聞いて、見下ろす。見下ろす先にはリグレットとい

オン。オラクル兵が5人いた。

「オラクル兵は全滅させたはずなのに……」

「大方、別のところから連れてきたのだろう。」

面倒だなく。不意討ちに失敗したら、イオンを人質にされるし……

作戦を練り直そうとした時、同じく導師イオンを取り返そうとしていたグループが動き出した。

ああゝ居るの忘れてた。

「「ひどっ!!」」

心を読まない!!

さて、イオンを取り返そうとしたルークたちだが……

六神将、妖獣のアリエッタの不意討ちによって、窮地に陥っていた。

「助けないとマズイよね？」

「「当たり前だ（です）」」

だよねゝ。

譜銃を出して構える。そして、スコープを覗きイオンを捕らえてる2人のオラクル兵に照準を合わせる。

貫通能力が高い弾じゃないと弾かれるかな？ あんまり持ってないから、節約しないとね。

弾を2つ装填する。

「シュートッ！」

放った2つの弾丸はオラクル兵に命中し、絶命する。

「誰かが降りてきたみたいだな。」

地上を見ると金髪の男性が残りのオラクル兵を倒していた。しかし、なのははジェイドが槍を向けている相手に驚いた。

なっ！アリエッタ！何で居るの？！

ジェイドが人質にしていたのは……なのはの妹分、アリエッタだった。

『アリエッタ！何で居るの？！』

急いで念話を繋げる。

『ごめんなさい、姉様。でも……姉様が心配で……』

『もう……でも、心配してくれてありがとう。』

『それとクイーンは、チーグルの森から北の方の森に移動したから。』

『わかりました……です。姉様、気をつけて……です。』

『ありがとう。』

念話を切ってルークたちの元へ向かう。

「導師イオン！ご無事ですか！？」

無事なのは知っているけど、心配しているふりをする。

「ええ。僕は大丈夫ですよ。」

「話は後です！急いで逃げますよ！」

ジェイドの提案で急いでその場を離れる。

「ここまで来れば、大丈夫でしょう。」

「ガイ！久しぶりだな！」

「失礼ですが、貴方は？」

「俺はガイ・セシル。ファブレ公爵家の使用人だ。ルークを迎えに来たんだ。」

「これはご丁寧に。マルクト軍第七師団師団長、ジェイド・カーテ

イス大佐です。」

手を出して、握手をする。

「ティア・グランツよ。よろしく。」

ティアも握手しようとするが…

「ヒッツ！」

ズサーッ！

後ろに後ずさるガイ。

ティアも唾然としている。

「ガイは女嫌いなんだ。」

「というより女性恐怖症のようですね。」

「わっ悪い！君がどうというわけではなくて……」

「私のことは女だと思わなくていいわ。」

といいながらガイに近づくティア。後ずさるガイ。

「……………わかった。不用意に貴方に近づかないようにするわ。」

ティアのほうが一先におれた。

「すまない。……………ところで後ろの3人は？」

ガイが私たちを指差す。

名乗らないと失礼だね。

「フィーネシア・ベルセルクだよ。」

「リインフォースだ。」

「アルベル・ベルセルクです。」

「まさかアンチスコア？」

頷く。

「女性ばかりだな。」

ピシッ！

辺りの空気が絶対零度と化した。

地雷を踏んじやたね、ガイ。アルベルから黒いオーラが出てるよ。

「ガイさん。僕は男です。」

冷めた声で言う。

「いや、どっからどう見ても女の子だろ？」

ピキッピキッピキッ

あー。自分から死亡フラグ立てちゃって……どうなっても知らないよ。

「……………ガイさん。ちょっと……………」

ガイを近くにあった林へと連れ込む。

ガイは自分から死地へと乗り込んでいきました。

暫くするとガイの叫びが聞こえてきました。結界も張って逃げられない状態での殺し合い。きついな。

みんな合掌してるよ。そう言えば…ジェイドさんは知ってたのかな？

「イオン様から聞いてましたから。」

……心を読まないで…

因みにルークに「心配じゃないの？」と聞いたたら…

「あれは自業自得だろ？」

と即答されました。

哀れ。主人からも見放されてるよ。

ガイとアルベルが戻って来たのは、20分後でした。アルベルはすつきりしたような顔だけど……ガイはボロ雑巾状態。

またしても、ジェイドさんの提案でセントビナーへ向かうことになりました。

ガイはアルベルが引きずっています。回復してあげればいいのに……

（セントビナー）

タルタロスでオラクル兵を全滅させたおかげか、セントビナーに検問を張られていなかった。ルークたちはマルクト軍の駐屯所（？）にいる。私たちは、宿屋で一休み。因みにガイはアルベルがしぶしぶ治療した。

「次はカイツールか…何事もないといいんだけど…。」

「導師イオンがいる限り六神将が襲ってくるだろう。面倒事は免れん。」

「そうだけど……」

コンッコンッ

窓を叩く音が聞こえる。

「お姉ちゃん。アリエッタのグリホオンが来てるよ。アリエッタの手紙、みたい。」

アルベルから手紙を受け取る。

「…………カイツールの前に面倒事、発生。」

正直嫌になる。

手紙には、六神将、鮮血のアッシュの計画がこと細かく書かれていた。また、アリエッタも断る事が出来ないらしい。

「ルークを拐うか…どうしようか……？」

「殺すつもりはないのだろ？ならば、わざと誘いに乗り、相手の真意を探るべきだ。」

「それもそうだね。」

「それよりもお姉ちゃん。今日はもう休んだほうがいいよ。まだ疲労が抜けてないんだから。」

「…そうさせてもらうよ。」

そう言うとは私はベッドに入り、眠りについた。

第玖話

タルタロスから無事に脱出したなのは達。イオンの体調が優れないため、セントビナーで一夜を過ごすこととなった。

Tales of the abyss
（希望を紡ぐ者）

第玖話

タルタロス脱出から一夜明け、カイツールに向かおうとするルークたちだが……

「待って！オラクル兵がいるわ！」

ティアに言われて入り口を見るとオラクル兵と5人の六神将がいた。

「あれが六神将か……」

「ガイ、あいつらを知ってんのか？」

「結構有名だからな。金髪の女性が魔弾のリグレット。仮面の男が烈風のシンク。人形を抱いてるのが妖獣のアリエッタ。そして、あの大男が黒獅子ラルゴだ。此処にいない鮮血のアッシュだけか……」

使用人なのに物知りだね。それにしても……

「有名人ばかりだね♪」

「「「お前がゆうな。」」「」」

しくしく■

揃って否定しなくても……イオン様も苦笑いしてるし

「なあ、思ったんだけどよ。あんたらの二つ名の由来ってなんなんだ？」

「私たちも知らないよ♪だって勝手につけられたから。」

「確か：襲ってきたオラクル兵百人を1人も殺さずに追いついたから“不殺”の二つ名がついたって聞いたことがある。」

「何でオラクル兵に襲われたんだ？」

「フィーネシア達はアンチスコアという反預言派の人間ですから。」

「その際、導入された兵は三百を越えていたと言いますが……全て殺さずに？」

「帰ってきたのは、二百の兵だったはずですよ。」

「その内の百人は私が気絶させて……」

「残りの百人は、私が氷付けにした。」

「だから、“氷雪”という二つ名がついたのか。」

ガイが納得したのかうんうんと頷く。

「じゃあ…帰って来なかった百人は……」

恐る恐る尋ねるルーク。

「僕が殺したよ。」

「な……んで？」

「だって、お姉ちゃんを殺そうとしたんだもん。」

「百人のオラクル兵を閃光の如く全滅させた。その者の髪の色から“蒼穹”の二つ名がついたと聞きましたが…貴方だったんですね。」

「そうらしいです。」

アルベルの二つ名の由来って結構物騒だね。

「そう言えば、ラルゴで思い出したんだけど……」

アルベルが懷から小さい箱のようなものを取り出す。

「ラルゴがこんな物、持ってたよ♪」

子供のように箱のような物をジェイドに見せる。

「これは！アンチフォンスロット“封印術”！」

あれがアンチフォンスロット封印術なんだ。知識では、知ってるけど実物は見たことが無かったからわからなかった。でも、誰に使うつもりだったんだろ？

「アルベル。いつの間に盗んだの？」

アルベルに小さな声で話しかける。

「甲板で戦闘になった時。」

「……“目”を使ったの？」

「うん。」

“目”というのはアルベルの稀少能力^{レアスキル}“千里眼”のことである。

“千里眼”は簡単に言えば透視である。どんな隠蔽魔法が掛かっていても見破ることができる能力である。なのはがミッド式魔法を教えている際、偶々発見した物である。範囲はアルベルの視認できる範囲だが、けっこう便利な能力である。

閑話休題

「貴方が手に入れたなら、貴方が持つべきだ。」

ジェイドから渡された封印術を再び懐にしまう。

「六神将が去った。今の内にいくぞ。」

リインフォースに催促されて、カイツールに向かう。

くフーブラス川く

カイツールの途中のフーブラス川でルークたちは魔物の大群に襲われていた。

隊列は……

前衛

アルベル、フィーネシア、ルーク、ガイ

後衛

ジェイド、ティア、リインフォース

外野

イオン、ミュウ

という感じであった。

魔物を楽々と倒していく前衛組。更に後ろ方には、強力な譜術がお見舞いされる。哀れな魔物達であった。

くカイツールく

虐殺に近い戦闘を終え、カイツールについたルークたち。そして、関所（？）の前にはマルクト兵に交渉しているアニスがいた。

会話の内容からすると旅券を無くしたらしい。

あつ、引き下がった……

「月夜ばかりと思うなよ…」

腹黒……見た目と違って…

「アニス、ルークに聞こえますよ。」

「きゃわ〜ん♪私の王子様♪」

態度が全然違う……

「女ってこえ〜」

一概にそうとは言えないと思うよ。

「そう言えば、旅券はどうするの？」

「俺達はあるが…ルークとティアは持っていないだろうし……っと
！迎えが来たようだぜ。」

そこには、オラクル騎士団主席総長、ヴァン・グランツがいた。

「ヴァン師匠！」「ヴァン！」

ティアが殺気立ち、武器を構える。

「待て、ティア！お前は誤解している。まずは武器を納めろ。」

そう言われて武器を納めるティア。

「私は宿屋にいる。話を聞く気になったら、来い。私は逃げも隠れ
ません。」

結局、カイツールの宿屋に泊まることとなったルークたち。宿屋のバルコニーには、4人の人影があった。

「単刀直入に言う。私と協力しないか？」

ヴァンが切り出した。

「お断りします。私たちの目的はスコアを覆すことです。外郭大地を消滅させることでは、ありません。」

「お前たちも薄々、感ずいているのだろう？人の意識を変えられることを。」

「確かにそうかもしれない。」

「だが、スコアから脱却しようとする者が居るのも事実だ。」

なのはの言葉にリインフォースが続く。

彼女の言う通り、マルクト帝国はスコアから脱却しようとしている。キムラスカでも、一部の人間はスコアから脱却するべきだと唱えている。

「スコアから脱却することはローレライとユリアの願い。僕たちはそれを叶える！」

更にアルベルが続ける。

「あなたが外郭大地を崩落させるなら、私たちは全力全開で阻止する！！」

「……………そうか。ならば、その時は私も全力で相手になる。」

そう言うとヴァンは宿屋に戻っていった。

「早い宣戦布告だね。」

「だが、立ち止まるわけにはいかない。」

「……………わかってる。」

「「全ては元の世界に帰るために。」」

リインフォースとなのはは夜空に浮かぶ月を見ながら言った。そして、その様子をアルベル、さらに物陰から陰険眼鏡が覗いていた。

第玖話（後書き）

原作と違う展開してみました。

第拾話（前書き）

約一名、性格が違います。

第拾話

カイツールでティアの兄、ヴァン・グランツと合流したルークたち。宿屋で一泊したあと、キムラスカに向かう。

Tales of the abyss
（希望を紡ぐ者）

第拾話

カイツールの門を通過しようとしたとき、それは起こった。

「お姉ちゃん。」

異変にいち早く気づいたのは、アルベルだった。

「どうしたの？」

「誰かが僕たちを見ています。」

「!……誰か解る？」

「……（ふるふる）」

わからないらしい。

『おそらく鮮血のアッシュだ。上空からグリフォンに乗って観察している。』

『自分の居場所を奪ったレプリカの監視、みたいだね。』

しかし、何もせずに去っていった。おそらく、ルークたちを拐うための準備のために戻ったのだろう。

襲ってくるようすもないので気にせずキムラスカ領に向かうことにした。

キムラスカ領のカイツールに着くと一同は驚愕した。

誰かに襲われ、船は大破し兵士たちも傷ついていた。

なのはは襲った相手よりも傷ついている兵士たちを気にしていた。アルベルとリインフォースは治療に専念しているが、伏兵がないとは限らないので護衛に専念していた。

それに、襲撃した犯人には心当たりがあるのでルークたちほど混乱していなかった。

バサツバサツ

混乱していたルークたちの前にグリフォンに乗ったアリエッタが降りてきた。

やっぱりアリエッタか……かなりの被害が出てるのに、人的被害が全くないからまさかとは思ったけど。

「根暗ツタ！人に悪いことしたらいけないんだよ！」

「アリエッタ、根暗じゃないもん！アニスの意地悪！ガルドの鬼！

ダメ導師守護役！」

アニスに根暗と言われて起こったのかアニスの悪口をいう。

「なっなんですって〜！」

なんか行動は年相応だね。

アリエッタはアッシュからの伝言を伝えると飛び去っていった。

「約束を破ったら、殺す」って言ってたけど……アリエッタ、優しいから何もしないだろう。

なのはの顔からはアリエッタに対する絶対的な信頼をうかがえた。

アリエッタが去った後、アルベル、リインフォース、なのはは傷ついた兵士たちの治療を行っていた。

あらかたの治療が終わった時、イオンに拐われた人の救出を手伝ってほしい言われた。断る理由もないし、アリエッタと久しぶりに話したいという思いから引き受けた。

〜コーラル城〜

入った途端、魔物の不意打ちにあったが、あっという間に倒し、油

断したところグリフォンが拐っていった。

「みんなはさっきに行って！ここは私たちが引き受けるから！」

エクスカリバーを抜刀し、アリエッタの魔物を見据えながら言う。

寧ろさっさとどっか行け！

本心は違うのはであった。

ルークを探して他のメンバーが奥に行ったのを確認するとエクスカリバーを納刀する。

「ご苦労様、アリエッタ。」

「大丈夫だよ♪姉様。」

「素のアリエッタを見るのは久しぶりだな。」

「まあ、ずっとスパイ活動してたからね。」

実はアリエッタはなのはに会った影響か、かなり明るい性格になっている。しかし、事実を隠すというよりアリエッタ自身が仲のいい人物でないと本来の性格を出さないのだ。因みに該当するのは、アルベル、なのは、リインフォースだけである。

閑話休題

「アリエッタ、頼みがある。」

「？なに？」

「アクゼリユスの住人の救助を頼みたいの。」

「姉様の頼みなら喜んで引き受けるよ♪」

蔓延の笑みを浮かべて、了承してくれる。

「じゃあ、この子を連絡係りとして連れてって。」

口笛を吹いて一匹の鷹をよぶ。

「因みにその子…私の使い魔だから♪」

その言葉に三人は驚愕した。

「「「ええええー！！！！！！」」」

滅多に驚かないリインフォースでさえ、声を出して驚いた。

それもそのはず。アリエッタに多少の魔法は教えたものの使い魔を作る魔法は教えていないのである。

「アリエッタ、どこで覚えたの？」

「うん？休暇でシェリダンに行った時、プレシアって言う人が教えてくれたの♪」

プレシアさん………何、異界の魔法を教えてるんですか！

「他にもいろんな魔法を教えてもらったよ♪」

プレシアさーん！！！！

「じゃあ、この子も人型になれるの？」

「なれるよ。でも、今は無理だよ。」

「何故だ？」

「他のメンバーが帰って来たみたいだからね。」

「そう……」

ちっ！予想以上に早いな。もう少し手間取ってればいいのに……

「ごめんね、アリエッタ。アクセリウスで会いましょう。」

アリエッタの鳩尾に攻撃する。気絶したため、崩れる体を支えてゆっくりと床に寝かす。

ちょうどルークたちが帰って来た。

「アリエッタ、倒したのか？」

「気絶してるだけだよ。さて、目的を果たしたし港に戻ろっか？」

さてとアリエッタも連れていきやなきゃ。……あれ？ジェイドさん、何をして……！！

なのはが見たのは……アリエッタに槍を突きつけて殺そうとしているジェイドだった。

なのはの視界がモノクロの世界になる。

御神流奥義 神速

意識的に体のリミッターを解除して、超人的な速度を得るなのはが使える数少ない御神流の奥義、を発動してジェイドへと接近する。そして、エクスカリバーで槍を弾き飛ばす。

「……何をしているのですか？」

エクスカリバーをジェイドに突きつけたまま、冷めた声でいう。

「気絶してるので、ここで殺しておこうかと…」

「いったはずだよ。無害な人間は殺さない、それが私のモットーだと。」

「ですが、彼女は……!!！」

ジェイドはその先を言うことができなかった。なのはからは巨大な殺気が放たれている。

義理とは言え、自分を姉と慕ってくれる少女を殺そうとしているのだ。怒らないはずがない。

他のメンバーも余りにも巨大な殺気に立ち竦んでいた。

そして、なのはは気絶してるアリエッタを抱き抱え、城を去った。それにアルベルとリインフォースは続いた。

城には放心状態のメンバーが残っていた。

第拾話（後書き）

なのはさん、マジ切れ。ちょっと省き過ぎたかな？

第拾巻話（前書き）

今回はなんかグダグダになっちゃいました（笑）

今回はオリキャラが出てきます。（今後の活躍はあまりない。）

第拾壱話

コーラル城で六神将からルークを取り戻したなのは達。しかし、なのは達と他のメンバーに溝ができればじめていた。

Tales of the abyss

（希望を紡ぐ者）

第拾壱話

（船の中）

なのははコーラル城のことを思い出していた。

……少し言い過ぎちゃたかな……。よく考えたら、向こうは軍人なんだから……敵を殺すのは、当たり前だよ。それにアリエツタは無事にダアトに戻ったんだから。

「お姉ちゃん、気にする必要なんてないよ。」

アルベル……

「お姉ちゃんはお姉ちゃんが信じる道を行けばいいよ！」

ッ！……そうだよ。人によって考え方なんて違うんだから。私は私の道を行けばいい。

「ありがとうね、アルベル。おかげで元気が出たよ。」

「どういたしまして。」

「そう言えば、あなたの名前、聞いてなかったね。」

リンフォースの肩に止まっている鷹に声をかける。

「私の名前はサイロスです。なのは。あなたのことは主から聞いています。」

“サイロス”。古代イスパニア語で“天を駆け抜ける者”か……。

「サイロス。人間形態になって。そのままじゃ目立つと思うから……」

「了解。」

サイロスの姿が鷹の姿から、少女の姿に変わる。

「私が会った頃のなのはに瓜二つだな。」

変わったサイロスの姿は腰まで届きそうな栗色の髪、身長はアリエツタと同じくらいの少女だった。顔はリンフォースの言う通り、九歳ぐらいのなのはと瓜二つである。

多分、アリエツタが私をイメージして作ってんだろ……。それにしても、そっくり。違うのは髪型ぐらいだし。まるで、昔の自分が目の前にいるみたい。

「改めてよろしく、サイロス♪」

「此方こそよろしく。」

生まれてあんまり経ってないせいか、アルフさんみたいに感情豊かじゃないね。そう言えば、フェイトちゃん達どうしてるかな？
皆、心配してるよね。

時間の進みが同じとも限らないし……どうしよう。

「考え事の最中で悪いが、そろそろケセドニアに着くぞ。」

「ふえ！もうそんな時間ですか？」

「ああ。」

くケセドニアく

「ここに来るのも久しぶりだな♪」

「フィーネはここに來た事があるのですか？」

「はい。二年ほど前に。」

「ジェイド。私たちはお前達の用事が済む迄街を回って構わんか？」

「ええ。では、お互いの用事が済み次第、宿屋に集合という形で。」

「わかった。フィーネ、アルベル、サイロス、行くぞ。」

道具を買い揃え、集合場所である宿屋に着く。

そこには全員が揃っており、ジェイド達の用事（音素盤の解析等）が済むのに1日かかることがわかり、宿屋で一夜を明かすこととなった。

〵翌日〵

私たちは一足先に港に来ていた。ルークたちは音素盤の解析結果を受け取りに行った。

「遅いな〜。」

「何か問題が発生したのかな？」

「いやいや、お姉ちゃん、そんなに何回もトラブルに巻き込まれるわけが……」

「いや、なのはのが正解みたいだ。」

「誰がトラブル体質なんだろうね！」

ちよつと怒ったようにいうアルベル。

「来たぞ。……烈風のシンクに追いかけてるみたいだ。」

ちよつとアルベルの意見に同感。援護したいけど譜銃じゃ狙い難しい……しょうがない。多分、ばれないだろうし、大丈夫かな。

指先をシンクの方に向ける。

するとなのはの指先に桜色の球体が出来上がる。

久々に使うけど……迷ってる暇はない！

「アクセルシューター……シューートッ！」

なのはの掛け声と共にアクセルシューターが放たれる。放たれたアクセルシューターはルークたちの間を通り抜けてシンクに命中する。

よし！腕は落ちてない！！

「さっさと船に乗るぞ。」

一足先に船に乗り込み、続くようにルークたちが乗り込んでくる。

くキャッツベルトく

「で、何故烈風のシンクが追って来たのだ？」

「俺が知るか。」

「おそらく、この音素盤を取り返しに来たのでしょう。中身は…同位体の研究でした。」

同位体……確か、アリエッタがディストが研究してるって言ってたっけ……

『はい。確かにディストは同位体の研究をしています。』

ふん。……………!!

『サイロスッ! 私の心、読まなかった!?』

『私には相手の心を読む能力があります。』

……………もう何も言わない。

「あの……同位体の研究はディストが行っていると聞きましたが……?」

アルベルが問う。

「やはり……。でも、何故貴方が知っているのですか?」

「アンチスコアには、優秀な諜報員がいますから。」

「そうですか……」

「なあ、そのディストっ奴は何のため……」

ズーンッ!

なっなんだ!」

突然大きな振動が起こる。

「甲板のほうだ!」

（甲板）

甲板に出てみると……………

「はっはははは！」

奇妙なロボットと椅子に乗って浮いている人間がいた。

「久しぶりですね！ジェイド！」

「おや、はな垂れデリストじゃないですか。」

「薔薇！薔・薇のデリスト様ですよ！」

「死神デリストでしょ。」

「だから薔薇です！……………さあジェイド、音素盤を渡しなさい！！」

「その前に狩人が貴方を狙ってますよ。」

外野のほうをみると譜術を唱えてる三人組が……

あの六神将、本当に無用心だね。アリエッタから聞いてたけど……

「なっなにをしてるのですか？」

「……うるさい。」

「へっ？」

「無関係な人間を巻き込んで……許さない。」

なのはは激怒していた。

なのはが最も嫌うのは、無関係な人間を巻き込むことである。そのため、無関係な人間がいる場所では、周囲を巻き込む大威力譜術を極力使わないようにしているのだ。

此処なら被害が出る。なら……上空で攻撃すればいい。

『リインフォースさん、アルベル。』

『ああ。』『了解。』

「風よ、逆巻け　フローウインド!!」

アルベルとリインフォースの譜術によってロボットとディストが浮かび上がる。

「咎人に裁きの雷を」

譜術陣が展開される。

「雷鳴轟け」

上空にエクスカリバーを掲げ、先に譜陣が展開され、風の音素が収束する。

「全てを破壊する雷となれ」
更に風の音素が収束する。

「サンダー……」

エクスカリバーを振りかぶる。そして……

「ブレイカー!!」

エクスカリバーが振り下ろされ、雷の極光が放たれる。

「なっ!」

そして、ロボットとディストが光に飲み込まれる。

「ぐああああ。」

ひゅー　ぽっちゃん……

「うわー、死んじゃたかな?」

「死んでないでしょう。ゴキブリ並みの生命力ですから。」

「なら、もう少し威力を上げておけば良かった。」

なのはの言葉を聞いていた全員が同じことを思った。

なのはを絶対、怒らせてはいけない、と……

第拾巻話（後書き）

こんにちは、玄武の使者です。感想を参考にして頑張ったけど、なんかグダグダに……。私の文才の無さが実感できます。

サイロス

年齢..だいたい生後5ヶ月

素体..鷹

（その他）

アリエッタの使い魔。容姿はなのはと瓜二つ。違いは髪型のみ。近接戦闘を得意とし、譜術も使える。

サンダーブレイカー

属性..雷

（詠唱）咎人に裁きの雷を

雷鳴轟け

全てを破壊する雷となれ

スターライトブレイカーの雷属性バージョン。集めるのは、当然風の音素。チャージタイムを伸ばせば、威力も上がる。

第拾弐話

キャッツベルトで六神将、死神ディストを退けたルーク一行。その後、襲撃もなく、順調に航海も進み、一行はバチカルへと到着した。

Tales of the abyss

（希望を紡ぐ者）

第拾弐話

バチカルに無事到着つと。私たちの仕事も終わりだね。

「ジェイドさん。報酬の件ですが……」

「報酬の件はピオニー陛下に報告しています。報酬はピオニー陛下から受け取ってください。」

「わかりました。では。」

そう言って退室しようとした時……

「フィーネ!!」

ジェイドさんに呼び止められました。

「……何ですか？」

「その……コーラル城では、すいませんでした。」

私はきょとんとした。

「……謝ることはありませんよ。あれは軍人としては当然の判断ですから。それに私もごめんなさい。」

今度はジェイドさんがきょとんとした。

「仲間であるジェイドさんに剣を向けてしまいました。」

「……お互い様のようですね。」

「そうですね。」

私たちは微笑み合った。

ちようどいいかな。アニスもないみたいだから、知ってるほうが良いよね。

「実は、アリエッタは私たち（アンチスコア）のスパイ、つまり私の仲間です。」

ジェイドさんが私の言葉に目を丸くした。

「……なるほど。それなら今までの行動が納得できます。では、あのタルタロスの襲撃も？」

「……はい。すいません。守れなくて……。」

「あれは仕方ありません。あれだけの戦力でしたから。しかし、何

故タルタロスの位置が……」

私はその答えを知ってる。しかし、言うべきか迷っていた。言えばどこから漏れるか、わからない。でも……ジェイドさんなら……

「ジェイドさん、今から言う事は他言無用でお願いします。」

一応、念押しして

「アニスは……モースのスパイです。」

「!!まさか、アニスが……では、イオン様は……」

「イオン様は……モースに信用されていない。」

「しかし、何故？」

「貴方は答えを知っているはずですよ。」

「では、やはり……」

貴方の思っている通りですよ、ジェイドさん。導師イオンは……

「レプリカです。」

「しかし、何故貴方がそのことを……いえ。貴方たちなら、スコアの内容をしてもおかしくない。」

「……そろそろアニスが来るでしょう。私は失礼します。」

「ええ。また何処かで。」

「はい。ジェイド・カーティス。いえ、ジェイド・バルフォア博士。因果の交差路でまた会いましょう。」

スコア通りなら、アクゼリユスで会う事になるでしょうが。

そう言って私は退室した。

「やはり、知っていましたか……………」

ジェイドの呟きはなのはには聞こえなかった。

「戻ったか。」

「はい。報酬はピオニー陛下から受け取るようになって。」

「そうか。此方にはクイントを通じて、アクゼリユス救援の依頼が来た。」

「主を迎えにいきますか？」

「迎えはサイロスに任せるよ。合流地点はケセドニアの宿屋で。」

「御意。」

……………やっぱり、感情が少ないな。昔のアリエッタも感情が少なかったけど……

「私は一足先に主を迎えに行きます。」

そう言ってサイロスは姿を鷹に変えて飛び立って行った。

「我々も行くか。」

「はい。」

「此処なら誰にも見つからないだろう。」

着いたのは人気のないバチカル路地。

「レイジングハート。」

《了解。転移魔法、発動》

桃色の光が三人を包みこみ、三人はその場所から姿を消した。

くセドニア付近く

転移した先には、アリエッタが満悦の笑みを浮かべて立っていた。

……………なんでさ。

某錬鉄の英雄の言葉が浮かんだ。

「何でいるのアリエッタ？」

「教団から転移してきたの♪」

ちよつと待つて。バチカルからダアト迄はかなりあるはずだよ。サ
イロスが鷹でも、一時間はかかるはずだよ？

「私は転移魔法が使えるので……」

納得。バチカルから離れた途端、転移したわけか……

「アリエッタ、転移魔法もブレシアさんに……？」

「うん♪」

……もう何も言わない。

「予定より早く合流できて良かったものだ。」

「でも、クイントさんが来るまで時間がかかるから……結局は同じだ
と思いますが……。」

「あの人の事だ。今日の夜には着くだろう。」

「クイントさんならあり得ますね。」

あの人、独自の移動手段があるからね。昼間は無理だけど……

「取り敢えず、此処では魔物に襲われる。町に入るぞ。」

「」「了解♪」「」

あつという間に時間は過ぎて夜。

「来ないですね。」

「ああ。何か合ったのか？」

「あの人に限ってそれは無いかと……。」

「でも、クイントさんの事だから、余計な事に手を出してるような……。」

「誰のことかしら？」

「「「うわっ！」「」」

暗闇から現れたのは、黒い外套を着たクイントさんだった。

「はじめまして。貴方がアリエッタちゃんとサイロスちゃんね。」

「あつ、はい。」

「プレシアから聞いてるわ。貴方も私の事を聞いていると思うけど。」

「えっとよろしく願います。」

「全員、揃ったことだ。出発するぞ。」

私たちは頷いて、アクゼリユスへと向かった。

第拾弐話（後書き）

クイントさんが初めてまともに登場！！

代わりにローレライの出番が……………

なのはさんがアニスがスパイだと言う事をばらしました。

第拾参話（前編）（前書き）

誰か文才をください。

第拾参話（前編）

ケセドニアでアリエッタとクイントに合流したなのは達。一行は転移魔法を酷使したため、アクゼリウス手前の峠で休憩していた。

Tales of the abyss

（希望を紡ぐ者）

第拾参話（前編）

「クイントさん。アクゼリウスはどれくらい酷いですか？」

クイントは暗い顔をして…

「……正確な事はわからないけど………発生源である第14坑道は入るのはかなり危険らしいわ。」

第14坑道って………セフィロトの扉がある所だったはず……

「僕らが入っても大丈夫なんですか？」

「プレシアさんが対策法を考えてくれね。」

クイントが右手の指につけている指輪を見せる。

「指輪、ですか？」

「ただの指輪じゃあないわよ。この指輪は魔力を使って対瘴気ファイ

ールドを展開する優れ物よ。」

さすがは、大魔導師プレシアさん。こんな物を創れるなんて……。創成歴時代の人にだって無理だよ。

「ちゃんと全員の分を貰って来たから大丈夫よ。」

プレシア製の指輪を全員に渡す。

「ねえ、アクゼリユスの人を救出するのはいいけどさ。」

アリエツタが口を開く。

「一万人はいるアクゼリユスの民を何処に運ぶの？」

「アクゼリユスに着いたら、マルクトの軍人が来ているはずなの。ピオニー陛下からの指示でね。だから、ピオニー陛下の指示に従えばいいのよ。」

「ふん。」

「さて、そろそろ行くぞ。」

一行は再びアクゼリユスに向けて歩き出した。

くアクゼリユスく

アクゼリユスには、クイントさんの言う通り十数名のマルクト軍人が救助活動を行っていた。

するとマルクト軍人の1人がなのは達に気付いたのか、駆け寄って来る。

「クイントさん!!」

「フリングス將軍！」

どうやら2人は知り合いのようだ。

「私たちは治療でもしておきましょうか？」

「「「はい♪（ああ。）」「」」

〽数分後〽

「お待たせ。」

クイントさんが戻って来る。

「話は終わりましたか？」

「ええ。ピオニー陛下からの伝言よ。アクゼリユスの民はシェリダ
ンに避難させるように……だって。」

シェリダン！離れ過ぎてない！

「因みに手段は問わないそうよ。」

「つまり、気絶させて転移魔法で運んでも良いのだな？」

「その通りよ。マルクトのほうはタルタロスで運搬するらしいわ。」

「因みに、どれくらいの避難が済んでるんですか？」

「瘴気が酷くて大体20%ぐらいらしいわ。」

20%……単純計算で残りは八千人。転移魔法をフル活用してもかなりかかるような……

「なのは。言いたい事はわかる。だが、やるしかないんだ。」

「わかってます。」

く救助活動 一日目く

「まず、第14坑道にいる人から助けましょう。」

クイントさんの提案に従い、瘴気の発生源、第14坑道に向かう。

「瘴気がかなり濃いな。普通の人なら奥に行く事すら不可能だな。」

「こんな状態でも魔物は生きているから凄いですね。」

「同感だ。」

「はっ！」

ザシュッ！

「アルベル！リインフォースさん！サボってないで戦ってください。」

なのは達は魔物の大群に襲われていた。

「だが、こう狭くては戦えん。」

「僕も同じです。」

「それもそうか……。」

「けどね……譜術で援護してください！！！」

「坑道が崩れるかもしれないぞ。」

「そうでした。」

「でも、こう多くちゃあ！先に！進め！ない！わよ！」

クイントさんが魔物を倒しながら言う。

「なら………アリエッタ！」

「了解♪」

なのはの考えがわかったのか、了承する。

エクスカリバーに風の音素が集まる。

「風牙絶咬！」

「イービルライト！」

なのはとアリエッタの攻撃によって、群がっていた魔物が全滅する。

「じゃあ、先に進もつか？」

最深部に着くと其処は酷い有り様だった。作業員は全員、意識を失っていた。

「リインフォースさん。私とアルベルはセフィロトを見えます。」

「ああ。わかった。」

「行くよ。アルベル。」

「これがセフィロトの扉……。アルベル、お願い。」

「うん。」

アルベルのダート式譜術によって、扉が消滅する。

中に入ると記憶粒子セルパーテイクルが美しく煌めいていた。

「綺麗……………」

「お姉ちゃん、見とれてないでやることやりましょうよ。」

「はいはい。」

奥に行くと音叉のような音機関、パッセージリングが悠然と立っていた。

「これがパッセージリングだね。…………ローレライ。」

「ああ。…………封印を解いたぞ。」

「御苦労様。さてと私の仕事をしますか。」

私の仕事はパッセージリングの調査。メンバーの中で私が一番機械操作が得意だから、引き受けた。

えーと…………よし。出てきたって、ええっ！パッセージリングの耐久年数…二千年って！なら…………パッセージリングの繋がりを切って…………よし。これで他のパッセージリングに影響はでないはず。

「終わったの？」

「うん。戻るよ、アルベル。」

「はい。」

〽救助活動 二日目〽

「今度は第13坑道だな。」

「閉鎖されているから入れませんよ。」

「……………」

〽救助活動 三日目〽

「クイントさん。頼みます。今日だけは休ませてください!!」

連日の転移魔法行使でさすがに疲労が溜まっていた。

「ダ・メ」

「鬼! 悪魔! 人でなし!」

「悪魔でいいわよ。」

酷い、酷いよ。クイントさん。

「冗談よ」

助かった……。

第拾参話（前編）（後書き）

今回は前編、後編にわけました。

第拾参話（後編）（前書き）

ところどころグダグダです。

第拾参話（後編）

Tales of the abyss

（希望を紡ぐ者）

第拾参話（後編）

（救助活動 4日目）

住民の避難もあと少し。全員で住民を転移させ、昼間には住民の避難が完了した。

その時だった。ルーク一行が到着したのは。

「フィーネ！どうして此处に！？」

「ピオニー陛下の依頼です。イオン様。しかし、何故イオン様までアクゼリユスに？」

責任感の強いイオンの事だから、自分からお願いしたんだろうけど

「無理を言って連れて来てもらいました。」

やっぱりね。

「それで住民の避難は？」

ジェイドが問いかけてくる。

「全て完了したはずです。一応、これから確認に行くところです。」

勿論、嘘である。住民が全て避難したのは確認済みである。

「そうですか……先遣隊は？」

先遣隊？ 私たちはずっとこの地にいたけど……

「いえ、来てませんが……」

「ジェイド。ルークやティアはどうした？」

「2人なら第14坑道に入って行きましたけど……」

「本当ですか!？」

イオンの返答を聞いたアルベルは驚愕する。

「アルベル、リインさん。跳ぶよ!」

私たちは人目を気にせず疑似超振動を発生させる。

（セフィロト）

「さあ、愚かなレプリカルーク。力を開放するのだ。」

「させない！レディアント・ハウル！」

「なに！」

ヴァンが目線に向けた先には疑似超振動で文字通り“跳んできた”
なのは、リインフォース、アルベルがいた。

「成る程。発生した超振動を超振動で打ち消したのか……化け物だな。」

そう。跳躍したなのは発生した超振動がどうしようもない事を悟ると自分の超振動で打ち消すということでもない行動にでたのだ。
「化け物で結構。普通の人からしたら貴方も化け物ですけど？」

『アルベル。ルークをお願いします。』

ルークは超振動を使った反動で意識を失っていた。

『わかった。』

なのはの言葉を理解したのかルークの元に駆け寄るアルベル。

「私は言いましたよね？」

エクスカリバーに手を掛け

「外郭大地を崩落させるつもりなら……」

抜き放ち……

「貴方を殺すって！」

エクスカリバーの剣先をヴァンに向け、殺気を放つ。

「私も貴公と決着をつけたいところだが、無理のようだ。」

「な……！」

“何故？”と問い掛けようとしたが、地面の揺れにさえぎられた。

まっまさか……

そう思った瞬間、パッセージリングに罅が入り、粉々に崩れていった。

「くそっ！間に合わなかったか。」

「アッシュ！何故此处にいる！？」

「ふんっ！俺だけじゃないあんたの妹も連れて来てやったぜ！」

アッシュの奥からティアが出てくる。

「兄さん！外郭大地は存続させるって言ったじゃない！」

「メシユティアリカ！お前にもわかる筈だ。この世の愚かさだな。」

ヴァンが口笛を吹くとグリフォンが飛んできて、アッシュとヴァンを連れてとびさって行った。

「このままでは、此処も崩れるぞ！」

「みんな、私の周りに!!」

ジェイドたちがティアの周りに集まる。だが、リインフォースたちは動かない。

「フィーネたちも早く!!」

ティアが声を荒げる。

「私たちは大丈夫だよ。迎えも来たみたいだし。」

フィーネの言葉とほぼ同時に巨大なドラゴンが出現する。

「姉様! 大丈夫?」

ドラゴンの背中にいたのはアリエッタだった。

「ナイスタイミング!」

ティアたち（ジェイドを除く）は驚愕しているが、なのはたちはお構い無しにドラゴンの背中に乗る。（ちなみにルークはティア側）

ドラゴンに防御結界を張り、崩れる大地と共に魔界に降下してゆく。
クリフオート

「ありがとう、アリエッタ。」

「どういたしまして♪」

「ルークたちは何処に落ちたかな？」

下を覗き込みながら、ルークたちを探すアルベル。

「アルベル、落ちるぞ。」

「飛行魔法、行使するから大丈夫♪」

「んっ？……アリエッタ。あそこにあるタルタロスに向かって。」

「了解。」

ゝタルタロスゝ

タルタロスの甲板には私の予想通りルークたちが居た。でも、何か暗い雰囲気。

「アクゼリウスを落としたのはルーク。貴方なのよ。」

「おっおれは悪くねえ！」

このままだと面倒な事に成りそうなので口出しする。

「そうだよ。ルークは悪くない。」

「」「」「フイーネ！」「」「」

「ちょっとどういう事よ!」
アニスが反論する。

「言葉通りだよ。ルークは悪くない。誰かが悪いと言うなら……..
いや。話はユリアシティについてからにしよう。」

「ユリアシティ」

「ようやく来たか。」

ユリアシティにはアッシュが居た。

「アッシュ! お前、どうやって師匠のところ……」

「はっ! 裏切られてもまだ先生か。とんだお笑い草だな。」

「お前、何で力を開放した!？」

「だって……」

「だってもうそもねえ! 少し考えりゃわかる筈だろうが!」

「だっ大体、お前は何なんだよ!？」

「聞きたいか？」

まさか、あの事を……でも、ルークは今の内に知っておいたほうが

良い。

「俺はバチカル生まれの貴族だった。ヴァンに誘拐されるまでは……お前は俺の劣化複写人間なんだよ！」

「嘘……だ。嘘をつくな!!」

「殺るか？レプリカ。」

ルークとアッシュがお互いに斬りかかろうとするが、それは1人の女性によって止められる。

ジェイドたちは驚愕で動けなかった。

「話が進まないから、止めてくれないかな？」

2人を止めたのは、さっきまで傍観していたなのはだった。ルークを剣でアッシュを魔力で強化した鞘で止めていた。

「フィーネ……」

「お前……」

なのはは穩便に事を済まそうとした。だが……

「ふん！人間モドキのレプリカを助けるとは……」

アッシュの言葉がなのはの逆鱗に触れた。

「がはっ！」

いきなりアッシュが吹き飛ばされる。

なのはが思い切り蹴り飛ばしたのである。

ルークたちは啞然としていたが、この場にいるなのは友人関係を知ってる者（クイント、アリエッタ、アルベル、リインフォース）は“やっぱりか”という顔をしていた。

なのはの親友であるフェイト・テストロッサは仲間兼友人であるアリシア・テストロッサのクローンなのだ。クローンもレプリカも似たようなもので、なのはにとってレプリカを馬鹿にされる事は友人を馬鹿にされているようなものである。アッシュの言葉になのはが怒るのは当たり前のことなのだ。

閑話休題

「なっなにしゃがる！」

「……………」

「ケッ！レプリカを庇いやがって…とことん物好きだな。」

「人を庇って何が悪いの？」

冷めた声で言い放つ。

「レプリカは人じゃあ「じゃあ、人である証って何？」……………」

「私の親友にね、レプリカと似たような存在がいるけど、人と変わ

りないよ。」

「だからね……………レプリカを貶されると……………私の親友が貶される気分になるのよ……………」

アッシュは動こうとしない。否、動けないのである。なのはから巨大な殺気が放たれている。その証拠にアッシュの体は小刻みに震え、冷や汗を滝のように流していた。

なのははかなり怒っている。しかし、あるものによって怒りが冷える事になった。

「そこまでにしてあげたら？」

話掛けたのは、フェイトの姉にしてオリジナルのアリシアだった。

「アリシアちゃん……………わかった。」

しぶしぶ殺気を消すが、まだ不機嫌だった。

「アリシアちゃん、どうして此处に？」

そう。本来なら母親であるプレシアの護衛をするため、シェリダンにいる筈なのである。

「んっ？ ああ。サイロスのおかげで暇になったから、迎えに来たんだよ♪」

アリエッタの質問に笑顔で答える。

「さあ、とつとと市長のところに行くよ！」

困惑する者たちを残して、アリシアたちはユリアシティの奥に向かった。

第拾参話（後編）（後書き）

アリシアちゃん、登場。代わりにクイントさん、出番なし（笑）

第拾肆話（前書き）

急いで書き上げたため、グダグダです。

あと、かなりオリジナル展開になってきました。

第拾肆話

アクゼリユスが崩落し、ユリアシティにたどり着いたフィーネたち。
ユリアシティにはアッシュとアリシアがいた。

Tales of the abyss

～希望を紡ぐ者～

第拾肆話

～ユリアシティ～

市長の部屋になのはたちが集まっていた。

「フィーネ。説明していただけますね。」

「はい。実はアクゼリユスの崩落は預言に詠まれていました。」

その言葉に事情を知らない者だけが驚愕する。

「キムラスカとダートはその事を知っていながら、ルークを派遣した。」

「待ってください。僕はそんな預言を知りません。」

「当たり前です。貴方は道具なのですから。」

「ちょっと！どうゆうことよ！」

ルークもばらされたし、貴方の秘密もばらせて貰います。

「間違っではないはずですよ。導師イオン。いえ、七番目のレプリカイオン。」

「!!」

イオンの体が震える。

「証拠でもあるの!」

「あります。だって、僕がオリジナルなんですから。」

青い髪の毛から緑色の髪の毛に戻ったアルベルが入ってくる。

「うそ……イオン様と同じ顔……」

あれ？アリエッタが無反応。

『アルベルから直接聞きました。』

不意にアリエッタから念話が届く。

「僕は二年前、本当なら死ぬはずでした。しかし、僕はお姉ちゃんに助けられました。」

「なるほど。預言を狂わしているのは君たちだったのか。」

「それがローレライからのお願いだからね。」

「ローレライは存在しているのですか？」

「地核にいるよ。」

「それにルークは誰1人殺してない。何処にルークの罪があるのかな、オリジナルルーク？」

「ちっ！」

「だけど……それはフィーネたちが住民を避難させてたからで……それに俺は帰る場所を奪った。」

うわゝ。重症だね。

「それはそれとして、フィーネは預言の最後を知っているのですか？」

「知っています。預言の最後はオールドラントの終焉です。」

ルークたちは驚愕した。

「やはりそうか……」

「お爺様！知っていたのですか！？」

「いや。私も知ったのは最近のことだ。数日前、第七譜石らしき物が見つかり、それに書かれておった。ローレライが教えたのだ。全て真実じゃろう。」

「テオドル市長。私たちは外郭大地へ戻ります。」

「じゃが、ユリアロードは使えんぞ。」

しかし、なのははにっこりと微笑んで……

「大丈夫です。私には超振動があります。」

「ルーク。お前も私たちとこい。」

「えっ！」

「このままでは、お前とアッシュの間に大爆発が起きる。それを防ぐための処置だ。」

「……わかった。」

多分、わかってないんだろうな。まあ、後々説明すればいいか。

「じゃあ、失礼します♪」

私たちは疑似超振動でシェリダンへ跳んだ。

くシェリダンく

「来たわね。」

跳躍した先にはプレシアさんが待っていました。

「ただいま、お母さん♪」

「お帰り、アリシア。アリエッタも久しぶり。」

「はい。」

「さあ、準備は出来てるわよ。」

私たちはプレシアさんの研究所へと入って行った。

「大爆発については以上よ。わかった？」

「はっはい。」

自己紹介が終わり、大爆発についての説明が終了した。

「で、音素振動数を変えないといけないの。」

「そして、あの装置で貴方の音素振動数を変える。ただそれだけよ。じゃあ、装置に入って。」

ルークは言われるままに装置の中に入って行った。

それが地獄の始まりとも知らないで。

結論から言えば、本来の目的は達成できた。ただ問題が起こった。

「何でこんな目に……………」

私たちの目の前にいるのは……長い黒髪で青い目をした七歳ぐらいの“女の子”だった。

「可愛いよ、ルーク。」

「うるさい！！さっきまで笑ってたくせに！！」

涙目になりながら、睨み付けてくるルーク。

何故か実験のあと女の子に成ってしまったルーク。

「原因はわかったのか？」

「体が小さくなったのは、本来の年齢だからだけど……………性別が変わったのは、推測だけどローレライが干渉したからね。」

何やってんの！ローレライ！！

「まあ、諦めて女の子として暮らさない。」

「……わかった。」

「プレシア、“アレ”まだある？」

「あるけど……なるほどね。」

「その前に新しい名前を決めなくちゃね。」

「名前？」

「そう。借り物の名前じゃあなく、貴方自身の名前。」

「じゃあ……シルフィ。」

“シルフィ”……古代イスパニア語で“聖なる風の導き”か……

「シルフィか……古代イスパニア語で聖なる風の導きね。いい名前じゃない。」

クイントさんが素直な感想を言う。

「じゃあ、シルフィ。私が貴女を女の子として教育してあげる♪」

「えっ！ちょっと！」

ルークもといシルフィはクイントさんにひきづられて行った。

「お母さん。“アレ”って何？」

「ああ。アリシアは知らなかったわね。アリエッタを鍛えるために

作った“時の空間”よ。」

“時の空間”。プレシアさんが言うには創世歴時代の遺産で一年間を1日にする物らしい。

「貴方たちも疲れたでしょ？宿屋で休んで来なさい。」

「そうさせて貰います。」

正直、只でさえ負担が大きい疑似超振動の跳躍を1日に二回も使ったので、疲労が溜まっている。私はプレシアさんの言葉に甘えさせて貰うことにした。

第拾肆話（後書き）

のりでやっつけてしまいましたルーク女性化。だが、後悔はしていない。
時の空間の元ネタはネギま！。

シルフィの設定は次回載せます。では、また会う日まで。

第拾伍話（前書き）

所々、グダグダです。

第拾伍話

大爆発^{ビック・バン}を回避するため、音素振動数を変える実験を行ったルーク。実験には成功したが、ローレライの干渉によって女の子になってしまった！！シルフィという新たな名前を貰ったシルフィはクイントによって“時の空間”に連行された。

Tales of the abyss
（希望を紡ぐ者）

第拾伍話

職人の町シェリダン。さまざまな職人が集う町である。それと同時に^{アンチスコア}反預言の本拠地である。

世に名をはせた^{アンチスコア}反預言のメンバーは研究所で紅茶を楽しんでいた。

「帰って来ないね。」

私が呟く。

「今日で7日目ですよ。」

アルベルが呟く。

「気長に待てばいいだろ？」

リインフォースが言う。

「ヴァンが動き始める前に帰って来るといいけど……………」

アリエッタが言う。

「暇だよ」

「我慢なさい、アリシア。」

クイントさんがシルフィを“時の空間”に連れて行って7日が経った。

「プレシア、“アルビオール”の方は大丈夫なのか？」

「私が参加したのよ。大丈夫よ。」

“アルビオール”とは創成歴時代の音機関…浮遊機関を搭載した飛行艇で此処シェリダンで作られている。アンチスコアの移動方法になる予定である。

移動は私には疑似超振動があるが疑似超振動はかなりの負担になる。

「浮遊機関の設計図も手に入れたし、“戻った”ら魔力を動力源にして、復元しようと思ってるわ。」

その瞬間……

「やっほ♪戻ったよ！」

上機嫌なクイントさんが大人ぽくなったシルフィを伴って現れました。

「皆さん、お久しぶりです。」

高くなった声でシルフィが言う。

そっか。此方では7日しか経ってないけど向こうは7年も経っているんだ。

「元が男性だったと言っても信じられませんね。」

「言わないでください。」

アルベルの感想に顔を赤らめて答えるシルフィ。

「あの……新しい武器が欲しいです。」

「「「「?」」」」

シルフィの意見は、この体になったため、筋力が落ち、今までの剣では上手く振り回せない。なのでこの体で扱える武器が欲しいとのこと。

「大丈夫よ。シェリダンの職人に頼んでレイピアを作って貰ったから。」

プレシアが何処からともなく出した布に包まれたレイピアを渡す。

「ありがとうございます、プレシアさん。」

「いいのよ。それよりこれからの事を相談しましょう。」

「でも、情報がないよ？」

アクゼリウス崩落以来、ヴァンは目立った動きがないのだ。六神将（アリエッタが抜けてるため、五神将だが。（笑））も動きがない。「なら、外郭大地降下の準備を進めましょう♪」

「そうだな。パッセージリングの耐久年数が限界に近いしな。」

「異論はないわ。」

「暇が潰せるから、異論はないよ。」

「僕も異論はありません。」

「私もないよ♪」

「というわけで、パッセージリングの操作に向かいましょうか。」

クイントさんの提案に皆が賛成（アリスアちゃんだけ、理由が変だけれど気にしない♪）時に扉が突然、開けられた。

「ルーク!!」

扉から入って来たのは……使用人のガイ・セシルだった。

「貴方が言ってるのは、レプリカルーク？それとも……オリジナル

ルーク？」

ガイに問い掛ける。

「レプリカルークの方だ!!」

「シルフィ。お迎えだよ。」

奥に居たシルフィが出てくる。

「ルークは？」

気付かないよね。ルークだった頃の面影が全くないから。

「ガイ、久しぶりって言ってもわからないよね？」

ガイはシルフィを暫く見つめた後……

「もしかして…ルーク？」

「……（コクリッ）」

一瞬の静寂。

「えー!! ルッルークが女に!!」

「今の私は、シルフィって名乗ってるから、改めてよろしく。」

「あっ、ああ。よろしく……じゃなくて!! 何で女性になってんだ
!」

シルフィ、ガイに事の次第を説明中……………

「何で、ガイはシェリダンに？」

シルフィの説明が終わった頃をみはらかって、本題に移る。

「実は、導師イオンとナタリアがモースに捕まったんだ。」

またしても静寂。

「予想通りね。」

「あの性格からして、予想はしてましたけど。」

「さて、じゃあ誰が行くかな。」

「教団の構造を知ってるアリエッタとアルベルに私が付いていくよ。」

「

頼む。」

「私も行く〜♪」

立候補したのは、アリシアちゃんだった。

「プレシアさんの護衛はどうするのですか？」

プレシアさんは命を狙われやすい。プレシアさん自身戦う能力はあるが、ポジションは後衛なので前衛がいないと戦闘ができない。普段はアリシアちゃんが護衛兼前衛の役割をしている。

「リインフォースさんとクイントさんがいるし……」

「サイロスも置いておくから、大丈夫です。」

「じゃあ、大丈夫か。」

「プレシアさんは外郭大地降下の下準備をお願いします。」

「わかったわ。」

「じゃあ、行って来ます。」

そう言い残すと私たちは疑似超振動によって、ダートに跳んだ。

第拾伍話（後書き）

ガイ様、合流の巻。

キャラクター設定

シルフィ

容姿…青い目。腰まで届く黒い髪を肩で1つに束ねている。

武器…レイピア

ルークの音素振動数を変更する際、ローレライの干渉を受けたため、女性に。譜術が使える。年齢は十四。

第拾陸話（前書き）

スランプの状態で無理矢理書いたためか、かなりグダグダです。

第拾陸話

ガイの頼みでダアトに来たなのはたち。ガイからの情報でアニスと合流することに。

Tales of the abyss
（希望を紡ぐ者）

第拾陸話

「アニスは何処に居るんでしょうか？」

見つけようにも、人が多い。

「ばあっ！」

「うわああ！」

ガイが驚く。

ガイを驚かせたのは、探していたアニスだった。

「アニス！！！」

シルフィが言う。

「えーと…何処かで会いましたっけ？ はうあ！もしかして、ア
ニスちゃん、有名人♪」

「ルークだよ。ルーク」

復活したガイが言う。

「ええ！ルークが女の子に〜！」

アニスに事情を説明中……

「ビックリしたよ。ルークが女の子になってるなんて……」

「アニス。情報は掴めましたか？」

「ジェイドさん！」

「数日ぶりですね、フィーネ。」

「大佐〜。何時から居たんですか？」

「フィーネが事情を説明している時からですよ。」

相変わらず神出鬼没な人だな〜

「イオン様とナタリアは何処に居ましたか？」

「騎士団本部の最深部ですよ。」

最深部か。

「最深部なら、隠し通路がありますよ。」

アルベルの提案に従って、隠し通路から無事、イオンとナタリアを助け出す事ができた。助け出す際、シルフィの事を説明する羽目になった。アルベルとイオンの関係がギスギスしていた。まあ、大丈夫でしょ。

シルフィをジェイドさんに預けて私たちはパッセージリングの操作に向かうことにした。

一番近いザレッホ火山のパッセージリングに向かうことにした。

『それにしても…教団の内部に入口があるとわね。』

私たちはアルベルの案内で教団内部にあるザレッホ火山の入口を指していた。

『教団でもごく一部の人が知りません。』

隠蔽魔法を行使して、教団内部を堂々と進んで行く。

『あそこには、惑星預言プラネットスコアあるから……』

『へえ、アリエッタってザレッホ火山に来た事あるんだ♪』

アリシアが素直に感心する。

『うん。アルベルと一緒に。』

『はいはい。お喋りはそこまで。着いた見たいよ。』
なのはたちの目の前には、譜陣が浮かんでいた。

「じゃあ、行くよ！」

なのはたちは迷う事なく、譜陣の中に入っていた。

くザレッツホ火山く

「熱いよ。」

アリシアの真っ先の感想だった。

「火山だからね。」

「何を考えて火山に作ったんだろう？」

「さあ？」

上からなのは、アリエッタ、アルベルのセリフです。

なのはたちが次に見つけたのは……

「あれが惑星預言か……」

綺麗なクリスタルに見える惑星預言だった。

「この際だから、破壊しちゃおうよ♪」

アリシアが笑顔で言った。

勿論、全員が同意した。

「天候みつる所に我はあり。黄泉の門開く所汝あり。いでよ…神の雷……これで終わりだよ！インディグネイト・ジャツチメント！！」
惑星預言に神の雷の剣が降り下ろされた。

「始まりの時を刻め……壊れろ！ビックバン！」

巨大なエネルギーが惑星預言に襲いかかり、ヒビが入る。

「神の雷よ！我が槍となりて全てを貫け！穿て、雷の槍！インディグネイト・ゲイボルグ！」

雷が巨大な槍となり、ヒビが入った所に突き刺さる。更にヒビが大きくなる。

「大地の怒りをその身で受けろ！アース・ブレイク！」

土の音素が巨大なハンマーとなり、惑星預言に降り下ろされた。

惑星預言は粉々に砕け散った。ちなみに、上からなのは、アリエッタ、アリシア、アルベルの順である。

「じゃあ、パッセージリングの所に行こうか？」

再び、なのはたちはパッセージリングを目指して歩き始めた。

（数時間後）

パッセージリングに着くのに、結局数時間かかった。アルベルもパッセージリングの場所までは知らなかったため、しらみ潰しに探す羽目になったからだ。

「ローレライ、お願い。」

ローレライによってユリア式封呪が解除され、パッセージリングが起動する。

「此処からは私の仕事だね。」

ローレライの指示に従って超振動でパッセージリングに命令を書き込む。

「さてと最後の仕上げ。」

プレシアさんから教えられたミットチルダ式の特殊な封印を施し、ミットチルダ式の魔法が使えない者はパッセージリングを操作できないようにする。

「パッセージリングの細工終了。みんな、転移魔法を使うから、私のまわりに。」

全員が集まったことを確認するとプレシアさんの研究所まで転移した。

第拾陸話（後書き）

イオンとナタリアの救出シーンはカットしました。

オリジナル譜術

インディグネイト・ゲイボルグ

属性…雷（風）

使用者…アリシア

雷の槍を飛ばす術。貫通力、威力共に風の譜術最高。しかし、攻撃範囲が狭いのがたまに傷。

第拾漆話（前書き）

一週間ぶりの投稿です。

第拾漆話

ザレッホ火山のパッセージリングの操作を終えたのははシェリダ
ンに帰還した。

Tales of the abyss 希望を紡ぐ者

第拾漆話

シェリダンに帰還した翌日

「セントビナーの救助に向かってちょうだい。」

プレシアさんに突然、言われた。

マルクトのピオニー陛下からの直々の依頼らしい。

「アルビオールも完成したから。アルビオールで向かってちょうだい。」

アルビオールはパイロットと一緒に外で待機しているらしい。ちなみに同行するのは……アリシア、クイント、アルベル、アリエッタの四人。残りは地核振動の停止の作戦実行準備。

外には黒い飛行艇…アルビオール1号機と白髪ぱい髪の男性が居た。

「ギンジ、久しぶり。」

「久しぶり、アリエッタ。」

アリエッタは修行のため、シェリダンに居たため、ギンジと面識があったらしい。

「他の方ははじめまして。アルビオール1号機の操縦士、ギンジです。」

「「「よろしく♪」「」」」

「早速で悪いけど、セントビナーまでお願いします。」

「了解ッス。さあ、皆さん乗ってください。」

全員が搭乗するとアルビオールはセントビナーに向けて全速力で向かった。

「セントビナー」

シェリダンからセントビナーまではあっという間だった。来るまでにセントビナーの住人が移動しているのが上空から見えた。先に到着したシルフィが誘導を開始していたらしい。

しかし……

「まずい!!! 大地が降下し始めた!!!」

セントビナーが崩落を開始した。

「ギンジさん!!」

「了解!!」

降下を始めた大地に向かう。

降下がまだゆっくりだったため、大地に追い付くのは難しくなかった。

大地に着陸する。

搭乗口を開けて、大地に降りる。

「安心してください。僕たちはピオニー陛下の依頼で来ました。」

驚きを隠せない住人を安心させるアルベル。

「皆さん、早く乗ってください!!」

全員が乗り終わるのは時間がかからなかった。シルフィたちがある程度の住人を避難させておいてくれたおかげだ。

しかし、全員が乗り終わる頃には魔界に入り、落下速度が加速した。

無事に飛び立ち、住人をユリアシティに送り届けたのはたちは外郭大地に戻って来た。

「なっ!」

ルグニカ平野の様子を見たのはたちは驚いた。マルクト兵とキムラスカ兵が争い、戦争が始まって居たのだ。しかし、今の状態ではできる事はないため、シェリダンに帰還した。

「シェリダン」

「なるほど……。」

「開戦の理由はわからんからな……。」

「王女の秘密がバレたのかな？」

アリシアがポロツと言葉を漏らす。

「王女の秘密って？」

「貴方たちは知らなかったわね。今の王女は国王と血の繋がりはないわ。つまり、偽物。」

プレシアの言葉に三人（なのは、アルベル、アリエッタ。）は度肝を抜かれた。

誰の子供かわからないが誰かが子供をナタリアと入れ替えたらしい。そもそも遺伝子的にあり得ない。

「本当の親子じゃあなかったんですね、あの2人。」

アルベルが少し悲しげに言う。

「血の繋がりなんて関係無いと思うな。」

なのはの親友であるフェイトとはやては血の繋がった家族は居ない。
(フェイトの場合は目の前にいるが……) しかし、まるで家族のように過ごしている。なのはから見れば、血の繋がりなんて関係無いように思うのだ。

閑話休題

「でも、私たちには何も出来ないわ。」

今回はこれでお開きとなった。

開戦して数日後……シルフィたちがシェリダンを訪ねて来た。

「シルフィ、久しぶり♪」

「ええ、お久しぶりです。なのはさん。」

「今度はどうしたの？」

アリエッタが尋ねる。

「外郭大地降下作戦に必要な装置の製造をお願いしに来たのです。」
後ろに居たジェイドが返す。

「振動中和装置ですか？」

振動中和装置とは、大地の液状化の原因となっている地核の振動を中和するための装置である。プレシアが開発したが、地核の振動数がわからないため、保留になっている。

「使うには地核の振動数を調べる必要がありますが……？」

「それなら大丈夫だ。ベルケンドのい組が計測装置を作ってくれてな。此処に来る前に計測してきた。」

しかし、なのははあることに気が付いた。

「パッセージリングはどうやって動かしたの？」

「勝手に起動したよ。」

アニスが答える。

おかしい。ヴァンがパッセージリングを停止させてたはず………ティアもユリアの血族だけど体内に汚染された第七音素が流れ込む。平気で居られるはずがない。

実際、ザレッホ火山の時になのはにも汚染された第七音素が流れ込んだが、ローレライによって中和された。しかし、ティアには中和手段は無い。

我慢してるみたいだね。

「ティア。ちょっと……」

ティアを手招きして呼ぶ。近づいたティアの額に手をあてる。

ローレライ。力を貸して……………

超振動を操作してティアの身体の瘴気を中和していく。

「ちょっとは楽になった？」

「ちよつとどころか、かなり楽になりました。」

（やっぱり調子が悪かったんだね。）

なのはとティアの行動を静かに見ていたシルフィは心の中でそう呟いた。

地核の振動数を調べるためにタタル溪谷のパッセーヅリングの元に来た後。つまり、帰ろうとした時シルフィはティアの身体の調子が悪く思わしくない事に気付いたのだ。

「私はちよつと散歩して来るから。集会所に行けば、技術班が居るはずだから。」

「ありがとうございます。後は此方で何とかします。」

ジェイドが微笑みを浮かべ、返事を返す。

「お姉ちゃん、僕も行くよ。」

「アリエッタも行く♪」

余談だが、アリエッタの返事を聞いたアニスが「うわっ！きもっ！」
と言うのをアリエッタは聞き逃さず、ミッド式魔法（認識阻害魔法
＋ディバインバスター）をアニスに撃ち込んでいた。

くメジオラ高原く

メジオラ高原のセフィロトに到着。来た理由は当然、パッセーヅリ
ングの操作。ただし、ヴァンが停止させたため、ローレライに頼ん
で起動させてもらう。起動した瞬間、瘴気に汚染された第七音素が
流れ込むが、ローレライが瞬く間に中和する。ザレッツホ火山と同じ
手順で操作していく。

「よし！無事、完了。」

「じゃあ、戻りましょう。」

「アリエッタ、お腹すいたく」

「はいはい。帰ったら何か作ってあげるから。」

シェリダンに戻ろうとした瞬間……

《マスター。強力な魔力反応があります。》

レイジングハートが声を発する。

「「「！！」」」

三人は驚いた。なにせオールドラントにはなのは並みの魔力を持っているのはアリエッタと反預言のメンバーぐらいだからだ。
アンチスコア

「壁しか無いよ？」

レイジングハートが示したのはパッセーヰングの裏側。しかし、そこには壁しか無かった。

《いえ。確かにこの奥に強力な魔力を感じます。》

「ただの壁のように見えますが……」

「黒刀…拔刀!!」

背中から黒刀 漆黒を拔刀し、壁を十字に切り裂く。すると壁が崩れ、壁の奥から空間が現れる。

その空間には何もなく、台座があり、台座には鮮やかな赤色とオレンジ色の剣が鞘ごと刺さっていた。

「やっぱりフェイクだったか……」

「アルベル……何でわかったの？」

「この壁の模様だけ不自然に途切れてるからね。」

「よく気付いたね。」

なのはは台座に刺さっている剣を見る。

「かなりの魔力を保有しているみたいだね。」

「どうするの？」

アリエッタが小首を傾げながら聞く。

「持ち帰るよ。ヴァンの戦いに使えるかもしれないし。」

なのはは台座から剣を抜いて、鞘から抜刀しようとするが……剣は錆びているかのように全く抜けない。

剣をエクスカリバーを携えているのと逆の腰にさす。なのはたちはメジオラ高原を後にした。

第拾捌話（前書き）

約一週間ぶりの投稿です。

第拾捌話

Tales of the abyss
紡ぐ者へ希望を

第拾捌話

なのは達はメジオラ高原から戻って来ていた。シェリダンの郊外に差し掛かった時、シェリダンから白い装甲のアルビオール二号機が飛び立ったのが見えた。

「シルフィ達かな？」

一番、可能性がある一行の名前を挙げる。

「その通りだと思う。」

なのはの右に居たアリエッタが返答する。

「右に同じです。」

それにしても……何でアルビオールを？もうすぐ地核の振動停止作戦が始まるのに……

「まあ、アリシアちゃんに聞けば、わかるでしょ。」

「「同感」」

アリシアちゃんは陽気な性格なのに、私より賢いんだよね。色々知ってるし。

くシェリダンく

シェリダンの入り口でアリシアが仁王立ちしていた。

「遅い!!」

どうやら遅れた事にご立腹のようだ。メジオラ高原のパッセージリングの部屋を探検(?)していたのだ。

「ごめんね。……ところで、さっきアルビオール二号機が飛んでいくのが見えたけど、何かあったの?」

「シルフィ達がね、キムラスカの陛下を説得しに行ったよ。」

「なるほど。だから、アルビオール二号機を借りたわけか……でも、何でアリシアちゃんの手が赤くなっているの?」

よく見るとアリシアの右手が赤くなっていた。

「……キムラスカ行きを渋るナタリア姫をおもいっきり殴った。」

「「おいっ!」「」」

アリシアの言葉に全員が突っ込んだ。

偽物の王女とはいえ、殴るのはどうかと思うよ？

なのはは心の中で呟いた。

「過ぎた事を言っても仕方ないよ。プレシアさん、研究所に居る？」

「うん。」

アリシアの返答を聞くとなのはは早速で研究所に向かった。

「プレシアさん、メジオラ高原のパスセージリングの操作は終了しました。」

「そう。ご苦労様。」

「それとパスセージリングで気になる物を見つけました。」

「気になる物？」

「これです。」

腰に着けていた剣を見せる。

「膨大な魔力を保有しているのですが、刀身が錆びているのか抜けなくて……」

剣を真剣な眼差しで見るプレシア。

「錆びているんじゃないわ。特殊な封印が施してある。おそらく、この剣は“レヴァンティン”よ。」

「レヴァンティン！！」

なのはは驚愕した。

“業火の剣レヴァンティン”。オールドドラントでは無い次元世界で作られたロストログア。全てを焼き尽くすと言われている魔剣。

「でも、“レヴァンティン”は対になる“ファールウェル”と一緒に虚数空間に消え失せた筈では？」

“レヴァンティン”はとても強力なため、封印を施し使えないようにされている。その封印を解除するのには“聖剣ファールウェル”の存在が必要不可欠である。しかし、両方とも何十年も前に虚数空間に消え失せてしまったのだ。

ちなみに、何故なのはがこの事を知っているのかというと無限書庫に來た際、偶然発見したのだ。

「虚数空間の先が偶々此処だったということでしょう。」

「では、ファールウェルも？」

「断定は出来ないけど、可能性はあるわ。」

「ヴァンの手に渡ってないといいけど……」

「そうね。」

結局、レヴァンティンはなのはが持っている事になった。

それから、数日後……

宿屋で休憩していたのはは突然、目を覚ました。

（外が騒がしいな……）

宿屋の窓から外を見るとオラクル兵が街中に居た。

（まさか、ヴァンが地核の振動停止作戦を止めさせるために……）

「お姉ちゃん!!」

アルベルが慌てやって来た。

「わかってる!」

立て掛けてあったエクスカリバーとレヴァンティンを腰に着けて、集会所へと急いだ。

（集会所前）

集会所前ではタマラとイエモンがオラクル兵と戦っていた。シルフィ達が港の方に向かうのがチラッと見えた。

タマラにオラクル兵が襲いかかろうとしていた。

（神速！！）

視界がモノクロの世界になる。オラクル兵に接近するとエクスカリバーを抜き放ち、切り裂く。切り裂かれたオラクル兵は成す術無く絶命した。

「大丈夫ですか、タマラさん！？」

神速を解除し、タマラの安全を確認する。

「あ、あんたは！」

「アリエッタの姉貴分です！！イエモンさんと一緒に隠れてください！！」

「わ、わかった。」

タマラがイエモンを連れて物陰に隠れる。

『アルベル。イエモンさん達を守ってあげて。』

アルベルに念話を繋げる。

『うん。気をつけてね。』

『ありがとう。』

『アリエッタ、聞こえる?』

アルベルとの念話を切り、アリエッタに念話を繋げる。

『何ですか、姉様?』

『今、何処にいるの?』

『港の方でオラクル兵と戦闘中です。』

『わかった。そのまま守ってあげて。』

『うん。』

アリエッタとの念話を切る。

(これで港の方は大丈夫だね。じゃあ、此方に集中しないとね。)

「不殺のフィーネか……」

オラクル兵の中から黒い衣装を着た金髪の女性が出てくる。

「魔弾のリグレット……今回は殺さずに済ます自信は無いよ。」

「ふん！」

二丁の譜銃を抜き、構える。

パンッ！パンッ！

二発の弾が放たれる。

「烈風……一閃！！」

風の音素を集中させ、いくつもの鎌鼬を発生させる。

発生した鎌鼬は銃弾を切り裂く。リグレットは間一髪で避けるが衣装が若干切れ、血が流れる。

「ちっ！」

『《マスター！！》』

レイジングハートが警告する。背後からオラクル兵が襲い掛かって来るが……

「はあっ！」

レイジングハートの警告のおかげで反応する事が出来たのはは、エクスカリバーを横に薙ぎ払う。空中で回避も出来ず、直撃し絶命する。

『ありがとう、レイジングハート。』

念話でレイジングハートに感謝する。

何分が経過しただろうか？幾多の攻防を繰り返していた2人は満身創痍。リグレットは服が切り裂かれた、血を流していた。なのはは切り裂かれて無いが、所々血が滲んでいた。譜銃と譜術の連携はなのはを苦しめていた。足元にはオラクル兵の死体が転がっていた。

（このままじゃ、殺られる。使うしかない！！）

エクスカリバーを天に掲げる。

「我望むは聖なる力！！」

我が道を阻む愚か者に…

聖なる鉄槌を！」

エクスカリバーに四種類の音素が集まっいく。するとエクスカリバーはより一層輝く。

「闇は全てを呑み込み！！」

エクスカリバーの先端に黒い刃が伸び、広範囲を一振りで一掃する。

「光は全てを照らす！！」

リグレットの背後に回り込み、上空へ切り上げる。

「業火は全てを燃やし！！」

刀身に炎を纏い、上空で連続切りをお見舞いする。

「烈風は全て切り裂く！！」

リグレットを地面に向けて、叩きつける。

「奥義！！幻魔四聖天翔斬！！」

黒、金、赤、緑の光が巨大な剣を形成し、振り下ろす。

土煙が舞い上がる。

土煙が明けるとそこには肩で息をしているなのはと絶命したリグレットが居た。しかし、なのはは突然、倒れてそのまま眠ってしまった。

第拾捌話（後書き）

リグレットは此処で退場して貰いました。

リグレットファンの人はすみません。

予定では、後二話ぐらいで完結するつもりです。

第拾玖話

Tales of the abyss
紡ぐ者へ希望を

第拾玖話

地核振動中和作戦。

魔界の液化化した大地を元に戻すために実行した作戦。タルタロスに中和装置を取り付け、それを地核へと沈める作戦。直前にオラクル騎士団の襲撃に会うもののアリエッタ、フィーネの活躍により撃破。作戦中にシンクに襲われるもシルフィらの活躍で撃破。その後、シンクは自殺。イレギュラーはあったものの作戦は無事成功。

地核振動中和作戦から数日後。秘奥義“幻魔四聖天翔斬”の反動で眠っていたなのも無事に目を覚ました。

「私が行かなくて大丈夫ですか？」

なののがプレシアに尋ねる。

なののが心配しているのは、ロニール雪山に向かったシルフィ達

事だ。シルフィは超振動を使えないため、アッシュが同行している。因みにアッシュはシルフィがレプリカルークである事を知らない。アッシュはレプリカルークは死んだと思っている。

「安心なさい。クイントが鍛えたシルフィも居るし大丈夫よ。」

クイントが直々に指導したシルフィはメンバーの中で最強と言っても過言ではないくらい強い。

「確かにそうですね。……後は不測の事態が起こらない事を願うだけです。」

「ええ。それよりも貴女、体は大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ。」

「リンカーコアの亀裂もかなり修復したしね。でも、無理は禁物よ。」

なのはがシェリダンに滞在するようになってからなのははリンカーコアの修復を受けていた。プレシアの言葉になのはは静かに頷いた。

「姉様!!」 「お姉ちゃん!!」

慌てたアリエッタとアルベルが入ってくる。

「どうしたの？」

「セルバードイクル記憶粒子が逆流してるの!」

「『！！！！！』」

セルバークティックル
記憶粒子が逆流する事は本来あり得ない。逆流するとセフィロトツリーの力が弱くなるからだ。

「まさか……ヴァンが?!」

「そんな事、不可能です!! パッセージリングには封印が……」

パッセージリングにはなのはが施した特殊な封印が掛けられている。その封印が解けない限りパッセージリングの操作は不可能なのだ。

「アブソーブゲートでしょう。あそこなら、封印に構わずパッセージリングを操作出来るはずよ。」

「!! アルベル! アリエッタ! 皆を集めて!! 集まり次第出発するよ!!」

数分後、アンチスコアのメンバーを乗せたアルビオールが決戦の地、アブソーブゲートに飛び立った。

くアブソーブゲートく

アブソーブゲートではすでにシルフィ達がヴァンと戦っていた。

「お前達の相手はこいつだ!」

ヴァンの言葉と共に、異形の生物が空から降ってきた。

「「なっ！」」

その生物を見たのはとリンフォースは驚愕した。

降ってきた生物はかつてなのは達が倒した“闇の書の闇”だった。

「サンダーレイジ！！」

最初に攻撃を仕掛けたのはプレシアだった。

正に雷のような一撃が“闇の書の闇”に襲いかかる。雷は直撃する。しかし、再生しない。どうやら姿が同じだけの異なる生物のようだった。

「高町！！合わせろ！！」

「はい！」

リンフォースの右手に“夜天の書”が現れ、ページが捲られていく。ベルカ式の三角形の魔法陣が展開され、白銀の3つの球体が形成される。

「全力全開！！」

なのはの目の前に環状のミッドチルダ式の魔法陣が展開される。桜色の光が集まって桜色の球体を形成する。

なのは達は何をするのか察したプレシアはアリエツタ達に指示を出し、強固な結界を張る。

「スターライト……」

なのはが手を振り上げる

「響け 終焉の笛…ラグナロク……」

リインフォースも同じように手を振り上げる。

「『ブレイカーー!!』」

2人の最強の魔法が放たれた。

直撃した生物は力無く倒れた。誰もが終わっただろうと思った瞬間、生物の殻を破って巨大な青い竜が出現した。

「烈風一閃!!」

風の音素を最大まで集束した風の刃が放たれる。普通なら一撃で絶命する威力である。

だが……

「う…そ……」

誰もが驚愕した。アンチスコアの中で最も高い攻撃力を誇るなのはの全力の攻撃に“傷1つ”つかなかった。

なのはが足を止めたのが悪かった。竜の腕に付いている刃が迫った。

「!!」

咄嗟にエクスカリバーでガードするが、そのまま吹き飛ばされる。そして、背後の岩に打ち付けられ、そのまま力無くもたれ掛かった。アルベルが叫ぶ。しかし、竜に阻まれ、助けに行く事が出来ない。

なのはの意識は朦朧としていた。岩に当たった時に切ったのだろうか、額から血がながれ、片目の視界を防いでいた。

（痛い……）

なのは視界にボロボロになっていく仲間の姿が見えた。

（守らなきゃ……みんなを守らなきゃ……。）

立ち上がろうとしても立ち上がれない。

（プレシアさんとアリシアちゃんとリインフォースさんと……みんなを守る!）

なのはの目に光が戻る。朦朧としていた意識ははっきりし、ゆっくりと立ち上がる。

「私は不屈の翼。そうだね、レイジングハート？」

《はい。マイマスター。このくらいで諦めてわ、不屈のエース・オブ・エースの名が泣きますよ。》

「ふふ。」

その瞬間、エクスカリバーの姿が変貌する。銀色の刀身に黒い鍔と柄。

《データ照合……間違いありません。聖剣ファールウェルです。》

「これが……ファールウェル……」

まさかと思いレヴァンティンに手をかける。するとレヴァンティンは簡単に抜けた。鞘と同じ色の刀身が現れた。レヴァンティンは抜き放った瞬間、今までよりも多い魔力を発する。

「炎牙…天翔波!!」

炎の巨大な斬撃が発生して、竜に向かって行く。すると全く傷つかなかった胴体に一筋の切り傷が入る。

「よし！」

一気に駆け出して竜に止めをさそうとする。しかし、竜も刃を降り下ろす。

ガキーンッ!!

大きな金属音が響く。

竜の刃を受け止めたのは黒刀を握ったアルベルだった。アルベルの服は所々が切れていた。

「お姉ちゃん！！行って！！」

「ありがとう、アルベル！！」

竜が再び攻撃を加えようとするが、雷で妨害される。

「行きなさい。」

「さくつと決めちゃえ♪」

雷を放ったのはアリシアとプレシアだった。

今度は桃色のバインドが巻き付けられ、竜を動かなくする。

「姉様、行って！！」

バインドをかけたのはアリエッタだった。

今度は竜が火球を吐き出し、吐き出された火球はなのに向かって直進する。

しかし、なのはは立ち止まらずに駆けている。火球はなのはに当たる直前で十字に切り裂かれた。

「行け、高町!!」

竜は必死にバインドから逃れようとするが、逃れられない。

なのは目の前に空の道、ウイングロードが展開される。空の道は竜の頭上まで伸びていた。

「外したら承知しないわよ。」

クイントが作り出したウイングロードを駆け上がり、竜の頭上に向かってジャンプする。

「業火一閃!!」

レヴァンティンが炎を纏い、巨大な斬馬刀と化す。

「エンシェント・フレイム・ザンバー!!」

竜は真っ二つに切り裂かれ、音素となって消えて行った。

「私は……あの人と決着をつけてきます。」

なのははそう言い残すと再び駆け出した。

最終話& a m p; エピローグ (前書き)

最後の最後でグダグダになってしまいました。

最終話& a m p ; エピローグ

最終話& a m p ; エピローグ

みんなの協力で竜を倒したなのはヴァンの元に急いでいた。

すぐにヴァンとシルフィ達が戦っているのが見えた。戦況はヴァンの方が有利のようだ。

「お前達は何故、私の邪魔をする？」

ヴァンがシルフィ達に問いかける。

「外郭大地を守るためです。」

シルフィが答える。なのはは少し傍観する事にした。

「そして……大切な存在を守るために！」

シルフィがレイピアを抜いて、ヴァンに向かっていく。

「ならば、大切な存在がスコアに奪われたらどうする？」

ヴァンがレイピアを弾く。

「スコアとスコアを信じ続ける人間がいる限り…ユリアのスコアは破壊出来ん！」

ヴァンがシルフィに剣を降り下ろす。が……

ガキーンッ！！！！

金属と金属が打ち合う音が響く。

「フィーネ……」

「世界は何時だって！！こんな筈じゃない事、ばっかりだよ！！」

「昔から誰だってそうなんだ！」

「辛い現実から目を背けるか、立ち向かうかは個人の自由だ！」

「だけど…身勝手な理由に他人を巻き込んで良い理由は何処の誰にも有りはしない！！」

「くっ！」

ヴァンが距離を開けようとして、後ろに下がった瞬間……

グサッ！！

「なっ……に……！！」

背後から心臓を貫かれた。貫いたのは……

「アッシュ…!! 貴様…!!」

「俺はアッシュじゃねえ。……ルーク・フォン・ファブレだ!!」

アッシュ。いや、ルークだった。

「さようなら……ヴァン師匠。」

静かにそう呟き、ルークは剣を引き抜いた。

ヴァンの血が白い雪を赤く染めあげた。

ヴァンとの戦いは終結した。

ヴァンとのアブソーブゲートの戦いから数週間後……

シルフィ達は自分の居場所に戻って行った。

シルフィは家に帰らず、世界を渡り歩いている。

ガイは従者のペールと共にマルクトへ。

ティアはユリアシテイに。

アニスは以前と同様に。因みに現在の導師イオンがレプリカであると発表された。

ジェイドはマルクトに。ディストと仲直りしたらしい。今は2人して研究に没頭している。

ナタリアは正式にアッシュと婚約。アッシュは名前をルークに戻した。

最後まで生き残ったラルゴはナタリアに真実を話し、キムラスカで騎士団の隊長を努めている。

モースは自殺。

そして……アンチスコアのメンバーは……

レムの塔 最上階

「プレシアさん。研究所にデータを残しておいてよかったんですか？」

「都合の悪い部分は削除したわよ。」

プレシアは研究所に“魔力”に関するデータと魔力炉の資料をおいて来たのだ。何でも、いずれ必要になる時が来る筈だかららしい。

「今日でこの世界ともお別れか……」

「その前に最後の仕事よ。」

クイントが言う。

なのはがレヴァンティンを床に突き刺す。

瘴気を焼き尽くしているのだ。全てを燃やし尽くす魔剣レヴァンティン。瘴気すら焼き尽くす。同時にローレイの封印も焼き尽くすのだ。

数分もすると第七音素が集まり、何かを形作り始めた。

《少々、荒々しい方法だったが、まあいい。感謝する、異界の戦士達よ。約束だ。受け取れ。》

あらかじめ元の世界に戻る者しか居ないようにしている。アリエツタが着いてくると言ったのには驚いた。

全員を光が包み、異界へと戻った。

この日、一つになった大地に居た人間はレムの塔から立ち上がる光の柱を目撃した。

Tales of the abyss 希望を紡ぐ者

完。

最終話& a m p ; エピローグ（後書き）

完結しました！

最初、書いていた時は読んでくれる人が居るのか？と思いましたが、意外や意外。結構な読者が居ました。作者としてはうれしい限りです。

私は別のペンネームで別の作品を投稿しています。良かったら読んでください。

ここまで読んでくれてありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2658i/>

Tales of the abyss ～希望を紡ぐ者～

2010年10月9日17時28分発行